HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	講演２ ハリー・ポッターと賢者の石 Harry Potter and the Philosopher’s Stone : 私は誰？ 錬金術的解釈〈象徴を手がかりに〉
著者	三浦，京子; MIURA，Kyoko
引用	北海学園大学学園論集(152): 215-252
発行日	2012-06-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《シンポジウム》 2011 年度　北海学園大学市民公開講座

講演 2　ハリー・ポッターと賢者の石

Harry Potter and the Philosopher's Stone

── 私は誰？　錬金術的解釈 ──

〈象徴を手がかりに〉

三　浦　京　子

── 序 ──

【象徴とは何か】 ラングドン教授『ダ・ヴィンチ・コード』(1) による定義

> 象徴とは一種の**言語**です。過去を理解するための手がかりです。ことわざにもあります。絵画は千の言葉を語るとか。」でもどんな言葉なのでしょう。……
>
> **過去**の理解の度合いで，私たちがどれだけ**現在**を理解できるかが決まってきまってきます。だが，どのようにすれば**真実**が見出されるのか，そして私たちがどのように歴史を記録するなら**自らを定義**できるのか。何世紀にもわたって歪められてきた歴史をどのように読み解けば**本来の真実**がみつかるのか，**今夜**はその**探求の旅**に出発しましょう。

【真実とは何か】 『ダ・ヴィンチコード』と『ハリー・ポッターと賢者の石』(2) の共通テーマである。

『ダ・ヴィンチ・コード』の主人公ラングドン教授は，現代に伝わる人類の歴史が何らかの理由で歪められ真実が隠蔽されていると考える。そして隠された真実を開示することが重要であると訴えるとともに，手段としては古より今に伝わる象徴に秘められた意味を解読することが有益であると主張する。

「真実とは何か。」この問いは，歴史の真相を暴くのみならず，ラングドン自ら「どのように歴史を記録するなら自らを定義できるのか。」と述べているように，「人間とは何か。何処から来て何処に行くのか。いかに生きるべきか。」といった古代ギリシアの哲学者たちを悩ませた命題をも想起させる。彼らは自分たちを取り巻く自然に注目し，人間のみならず誕生し成長を遂げ枯死するもののやがて不滅の魂を宿して再生する万物の天衣無縫とも言える在り方に関心を持ち，「存在とは何か」と問い続けた。「自然」および「物事の本性・本質」という言葉は表現こそ異なれど意

味するものは同じであると考えて「フュシス」と名付けた。従って英訳されたNatureもおのずとこのような両義性を持つことになる。

彼らに答えを見出させたものは，アニミズム的自然界に存在する様々な「象徴」であった。たとえば，天空の彼方に輝く太陽や月そして満天の星を見つめるうちに，大宇宙と小宇宙（人間）とが照応関係にあり天体の動きを知ることによって人生のみならず国家の将来をも占い得ると理解して「占星術」を編み出した。

占星術は神秘的で魔術や錬金術といったオカルト[3]科学，数秘術，そして神話へと発展していったが，やがて近代科学が誕生し「科学の時代」と呼ばれ活況を帯びた17世紀，その座を譲り地下に姿を隠さざるを得なくなった。

しかし，合理主義を信条に掲げ認識手段として実験と観察を重視する近代科学が人生に関わる哲学的な疑問に答えるはずはない。まして近代科学によって構築され栄華を誇る機械文明と言えども自然の脅威には抗し難く揺らぐ現代，人々の空虚な心に神秘主義的なオカルト科学が蘇ったと考えても間違いではあるまい。『ダ・ヴィンチ・コード』や『ハリー・ポッターと賢者の石』など錬金術思想を展開する作品が爆発的な人気を博しているのがその証である。「存在とは何か」，「どう在るべきか」といった古代ギリシアの哲学者たちが論争に明け暮れた問いを，今また私たちも自ら発しているのだ。太陽や月そして星，さらに多種多様な象徴を解読することが自然回帰を可能にし，私たちを大いなる答えに導いてくれるであろう。

── ハリー・ポッターと賢者の石 ──

1．夜―プリベット通りで

映画『ハリー・ポッターと賢者の石』の冒頭。暗闇に浮かび上がる一羽のフクロウ。その足を止まり木代わりにかけている道標に「プリベット通り」の文字が見える。やがて飛び立ち宙を舞うと，その翼下に白髪の老人が姿を現わす。コートのポケットからライターを取り出し，空中高く掲げると，カチッと小さな音が弾けて街灯の光がライターに吸い込まれる。幾度か繰り返されて街並みはすっかり闇に包まれる。老人の足元で鳴き声を上げる一匹の猫。家屋の外壁に映る小さなシルエットが次第にふくらんで人の姿になる。二人はホグワーツ魔法学校の校長ダンブルドアと変身術を教えるマクゴナガル先生である。夜空に爆音を轟かせてオートバイが出現し着地する。降り立った大男ハグリットの掌中には赤ん坊のハリー・ポッターが眠っている。「本当にこの子をあの一家に預けるんですか。一日中見ていましたけど，ここの住民ときたらマグルの中でも最低の連中です。」といぶかるマクゴナガル先生に，校長は「他に親戚もないのじゃ。……この子はよそで静かに暮らすほうが良いのじゃ。時がくるまではな。」と即座に

答え，赤ん坊を唯一の親戚にあたるダーズリー家の玄関に置く。傍らに，手紙を添えて。

質問１．ダンブルドア校長先生がポケットから取り出したものは何ですか。
質問２．それは何をするためのものですか。

ここはマグルの世界。かつて神から生命を授かり楽園エデンに住まいを得たアダムとイヴの血を継承する人間の世界である。彼らは，祖先が神の命に背き知恵の実を食して堕落したが故に科せられた原罪を贖う一方で，既得の知恵を糧に近代科学を生み出して物質文明を現代に構築した。楽園から追われて労働を強いられ自ら創造の槌を振るうその姿は，万物の創造主として大工の異名を持つ神に酷似する。もはや人間は神を必要としないのである。ダーズリー氏はそのような人間の代表としてドリル製作会社を営む(原作)。科学を信奉する合理主義者で，不可思議な神秘主義など非常識であると考えて断固拒絶する。もはや神と人間との繋がりは，何処にも存在しない。

【天地創造 ── 闇から光へ】

人間そしてこの世界はいかにして誕生したのであろうか。キリスト教における神による創造過程は，『旧約聖書』の冒頭「創世記」(4) に記されている。

> In the beginning God created the heavens and the earth.　The earth was a vast waste, darkness covered the deep, and the spirit of God hovered over the surface of the water.
> 初めに神は天と地を創られた。地は混沌であり，闇が深淵をおおい，神の霊が水面に漂っていた。

人間ばかりかあらゆる生物が誕生する以前の原初世界。あたかも初めから神の居所である「天」とやがて人間の住居となる「地」とに二極分裂していたかのような印象を与える。しかし実在するのは混沌とした大地とその上に広がる深淵，そしてその水面を覆う暗黒の闇のみである。現在見られるような「天」と「地」を隔てる空間が生み出されていなかったにもかかわらず，何故このように書き始められたのであろうか。マーク=アントニオ・クラッセラームの著書『闇よりおのずからほとばしる光』(5) に一つの答えが見出される。

> もし天と地は現在のように整理され配置されていず，したがって天と地に分かれず混沌としていて，天は水と水とを分かつ穹窿ないし空間の名を受けるに価せず，無秩序な混沌つまり混沌塊であったというなら，それには私も同意する。ゆえにモーゼは，ここで宇宙全体を語るとき，可視的な上なる部分を天と呼び，それより粗大で元素的な下なる部分を地と呼ぶのである。

つまり，天と地とは言いつつも明確な境界線があるわけではなく，形なき原水から成る混沌塊の上下両端を漠然と言い表わしたにすぎないと理解されよう。むしろ，まず初めに混沌世界なるものが存在したことに注目すべきである。さらに同書は，混沌塊の内部は微動だにせず何ら生命力が開花する兆しは見られなかったと述べる。「動き」を生命力が存在する証とみなしたアリストテレスに従えば,原初の世界はまさに死を思わせる廃墟のごとく静寂に包まれていたと言えよう。

> ところで私は，さきに，深淵の名で呼ばれる混沌たる無秩序の蒸気が中心から発生し，その上に闇がひろがっていたと語った。そしてその時，われらの詩人が教えるように，すべての元素は何の秩序もなく混融して，完全な休息状態にあり，その深い沈黙はいわば死の似姿であった。作用因は何の作用も起こさず，受動素は何の変化も受けなかった。両者間の混合もなく，したがって生殖への移行もなかった。要するに，生のしるしも生産のしるしもまったくなかったのである。(6)

『旧約聖書』は，混沌とした大地と深淵，そして闇が神によって生み出された後で，深淵の面を漂う神の霊が「言（ことば）を発し名付ける」ことによってさらなる創造がもたらされたと述べる。沈黙を破る最初の言は「光よ，在れ。」であった。原水から成る混沌世界はいわば形無き「質料」のみの世界であったが，原光が「形相」として誕生し，天上世界すなわち神の玉座から鳩の姿を借りて飛び出し宇宙の中心点である地球（質料）に舞い降りて来る途中で，次第に様々な形態を付与された。光は形無き神の霊が顕現した姿で，照射されて誕生したあらゆる被造物は神を映す模像である。

> God said, ‘Let there be light,’ and there was light; and he separated light from darkness. He called the light day, and the darkness night.　So evening came, and morning came; it was the first day.
>
> 神は言った。「光よ在れ。」すると光が誕生し，神は暗闇と光を分けた。神は光を昼，闇を夜と名付けた。こうして夜が訪れ，朝を迎えた。第一日目が終わった。

また，『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」(7) には，言は神が現前したものであるとともに，漲る生命力によって万物を創造する輝かしき光となって混沌の闇を駆逐したと記されている。

FIAT
（フィアト　ルクス　光あれ）
ロバート・フラッド(8)

> In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God.
>
> He was in the beginning with God.　All things were made

through Him, and without Him nothing was made that was made.

In Him was life, and the life was the light of men. And the light shines in the darkness, and the darkness did not comprehend it.

初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは，言によって作られた。作られたもののうち，一つとして言によらないものはなかった。この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。光は闇の中に輝いている。そして，闇はこれに勝たなかった。

【闇とは何か ── 始源・混沌・カオス】

創造の第一日目。暗闇に閉ざされた世界に光が差し込み，昼と夜の区別がなされた。２日目には天空あるいは穹窿と呼ばれる空間（heaven）が生み出され，境界領域となって深淵の原水を「上なる水」と「下なる水」とに二分割した。この時点で「天」と「地」の二極分裂が完遂されたと言える。二元論的世界観の始まりで，天は能動的な男性原理，地は受動的な女性原理に支配されているが，両領域は未だ神による一つの絆のようなもので繋がっていた。天と地のみならず多種多様な物質へのさらなる分離が繰り返され増幅してゆく創造過程の始点でもあった。ところで「天」は何処を指すのであろうか。クラッセラームの前掲書[9]によれば，雲の上から水晶天と呼ばれる上なる水までの空間，あるいは，雲の上，七惑星およびその周囲の恒星を超えて天使たちや神の玉座に至るまでの三層から成る広がりである。

３日目，「地」は，「空の下なる水」が一箇所に集められて「海」となった結果，乾いた「陸」として出現し，植物の種が芽吹いた。クラッセラームは光が闇を海底に追い払った結果，いかなる運動もしない無秩序な混合物，新たな混沌が誕生したため，神は光の住居としてあるいは光の運び手とするべく「火」を大地に閉じ込めたと考える。[10]

４日目，昼と夜を司る太陽と月および星が上なる水を素材に作られ天空を明るく照らしながら回転し始めた。５日目には鳥が天高く舞い，魚が海中を泳いだ。６日目，最後に神は自分に似せて人間を造った。

Then God said, ‘Let us make human beings in our image, after our likeness, to have dominion over the fish in the sea, the birds of the air, the cattle, all wild animals on land, and everything that creeps on the earth.’

God created human beings in his own image; in the image of God he created them: male and female he created them.

すると神は言った。「我々の姿に似せて人間を作ろう。海の魚や空の鳥，家畜，地上のあらゆる野生動物，地を這うものすべてを支配するよう，我々に似せて。

神は自分に似せて人間を作った。神に似せて人間を作った。男も女も作った。

「神に似せる」とは，その形状のみならず森羅万象に及ぼす支配権をも共有することを意味する。「創世記」には上記のように人間を被造物の一つにすぎないとみなして他の生物と同様に言による誕生過程を記す版と，神が宇宙の塵（土・アダマー）を集めて自分に似せて形作り生命の息を吹き込んで誕生させた後にアダム（土から作られたもの）と命名したとする版が混在する。

The Lord God formed a human being from the dust of the ground and breathed into his nostrils the breath of life, so that he became a living creature.　The God planted a garden in Eden away to the east, and in it he put the man he had formed.

神は地の塵を集めて人間を作り命の息を吹き込んだ。すると人間は生けるものとなった。神は東の端のエデンに楽園を造り人間を住まわせた。

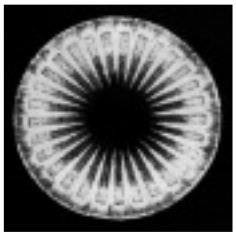
Then the Lord God said, ‘it is not good for the man to be alone: I shall make a partner suited to him.’　So from the earth he formed all the wild animals and all the birds of the air, and brought them to the man to see what he would call them; whatever the man called each living creature that would be its name.

神が言われた。「人間が独りでいるのは良くない。ふさわしい伴侶を作ってあげよう。」そこで神は地からありとあらゆる野生動物を，空には様々な鳥を生み出して人間が何と名付けるか見届けるために人間のもとに連れてきた。人間が呼ぶ名前があらゆる生物の名前になった。

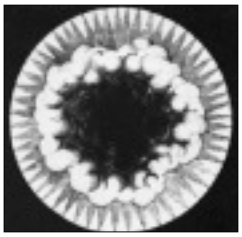
神が 6 日間にわたり様々な被造物を名付けることによって創造したように，人間も神の代理として同様の行為を許され神に準じる支配権を授与されたのである。しかし，まだ人間が神を凌ぐには至らなかった。

闇・カオス

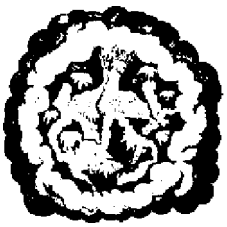
→


光の出現(11)

→

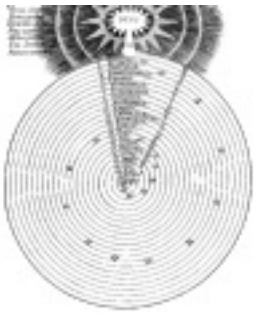

光と闇の分離(12)

→

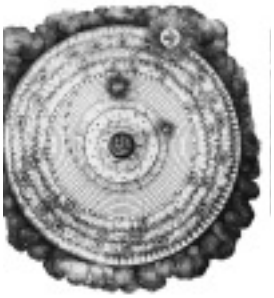

闘争する四大元素(13)

キリスト教は，このように源泉から分離することによって推進される創造過程を「無からの創造」と称す。「無」から「有」を生む神の超能力を誇示することが絶対的かつ不動の聖性を主張するための根拠になると考えたからである。しかし，必ずしも「無」は「虚無」「非在」を意味するわけではない。世界中に散在するすべての宇宙開闢説は，宇宙の起源に超越的な存在を認める。

キリスト教は神を，異教もまた神的存在を意識する。キリスト教徒は神を混沌の製作者と見做し混沌自体には何ら自立性を認めないのに対し，異教徒は混沌が初めから自らの内より生まれ出て生成する独自の生命力を宿すと考えたという相違はあるにせよ，天地創造に先立つ原初の状態が，混沌・カオスであったと考える点で両者は合意する。「原初の混沌」とは，形が定かならぬ無秩序の，あるいは未分化の状態を意味する。16 世紀イタリアに登場した神秘学者ロバート・フラッドが『両宇宙誌』（1619 年）に描いた混沌（カオス）の図[13] では，雲のようなものが取り囲む暗い宇宙内部の至る所で火山を思わせる炎が噴出している。異教的な解釈によれば，混沌はやがて生まれいずる万物を内包する世界卵であり，炎は創造を推進するエネルギー「火」である。異教の神は自ら火であり，その属性なる熱と光を所有して世界卵の上半分すなわち天界に存在する。古代ギリシアの哲学者ヘラクレイトスによれば，天地創造は神なる「火」が天界より流出し，その熱が冷える過程で「水蒸気（気・風）」に変わり，さらに凝固して「水」，最後に「土」が誕生する過程である。天動説を提唱したプトレマイオスが二世紀に描いた宇宙図には中心を占める地球から月に至る空間に四大元素が地・水・気・火の順で配置されている。ヘラクレイトスの主張が受容された証である。また，20 世紀の神秘家ルドルフ・シュタイナーは，水が液体・気体・固体に変化することから，世界を構成するのは水の三変態と考えられる「水・空気・土」であり変化させる力は「火」の熱であると主張した。両者ともに「火」から「土」が，すなわち「天」から「地」が生み出されたと考えていたと言えよう。キリスト教はこの流出説を受け入れ，火の「熱」を神の「愛」に置換して布教に努めたのである。



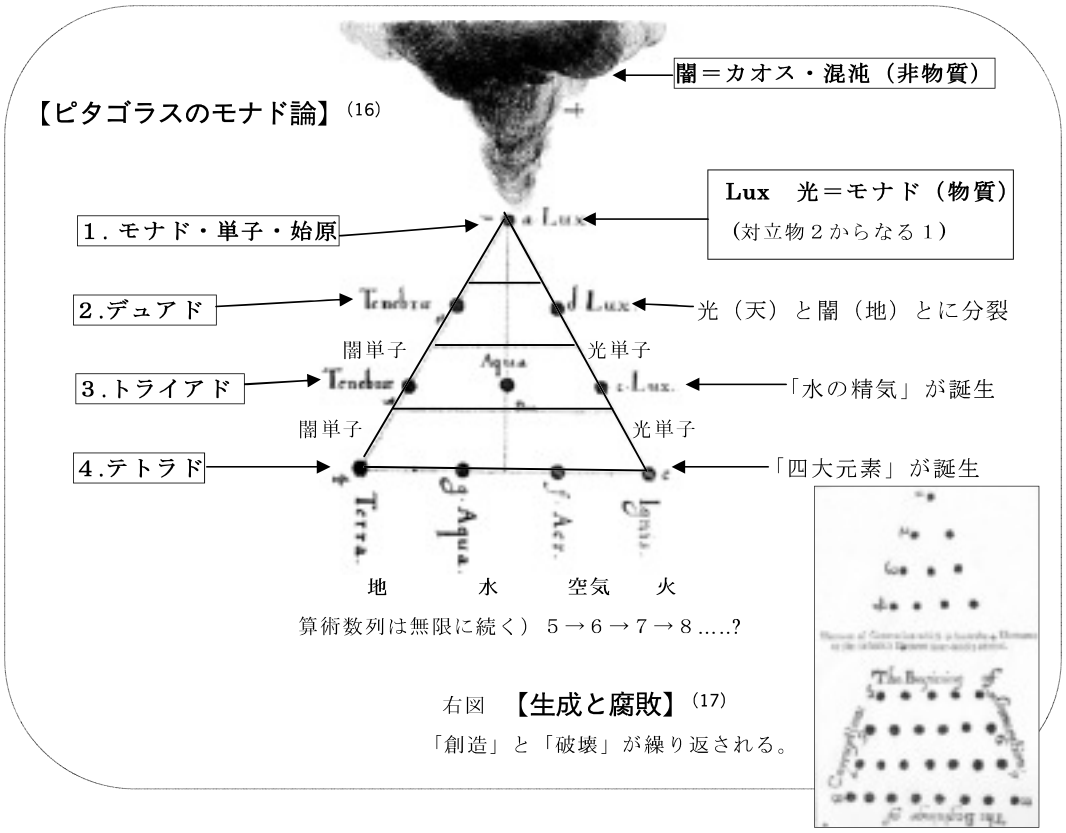
プトレマイオスの宇宙Ⅰ[14]



プトレマイオスの宇宙Ⅱ[15]

【闇（非物質）から「モナド」（物質）誕生】

神なる火あるいは形相の流出説は，ギリシアの哲学者ピュタゴラスに世界創造のモデルとなる「モナド論」を発案させた。モナドとは，世界を構成するあらゆる存在の最少単一要素で，「単一」を表わすギリシア語「モナス」から派生した。プラトンはモナド説を受容するに止まらず万物を生む源泉に「イデア」の概念を付加した。ロバート・フラッドによれば，ピタゴラスが発案したモナドは闇に包まれる原初の混沌から誕生した第一物質で，ルクス（Lux 光）である。つまり，



神なる火および光が非物質界から放出され，物質界との境界に存在するモナドを超えて侵入し光としての形態を得たと考えられた。世界創造のモデルは，モナドを頂点とするピラミッドの形で表わされる。第一物質であるモナドから生み出された光は両極化して，光と闇を表わす二つの単子デュアドを育成する。水の精気（Aqua）が加わって三つの単子トリアドを生み，さらに分裂して地・水・火・風（気）の四大元素を構成する四つの単子テトラドを誕生させる。その後も５・６・７・８と単子は増え続け，生成（Generation）と腐敗（Corruption）が繰り返される現実世界を形成する。つまり原初に存在したのは光なる形相と混沌なる第一質料のみであった。両者が結合した結果四大元素が誕生し，さらに元素どうしが混淆することで第一質料は二次的質料に変化して，生成と腐敗を繰り返しながら生命力を継承する自然界が出現したのである。

【混沌から秩序へ】

このような未分化から分化への，あるいは混沌なる無秩序から秩序への進化を必然とする神の欲求が，人間を駆り立て現代文明のさらなる発展に夢と希望を託し全力で邁進させていると言っても過言ではない。神による世界創造，および人間による文明開化は，「闇」を退け「光」を求め

る欲望が成せる業であったと言い換えられよう。神に似せて作られた人間，神の姿形ばかりではなく創造力をも分与された人間にとって，自らの誕生と死はまさに世界の始まりと終焉とを意味する。宇宙を操作し支配する力を得てあたかも神格化したかのような幻想を抱く現代人にとって神は最早不要である。19 世紀ドイツの哲学者ニーチェ曰く，「神は死んだ。」キリスト教によって育まれた真理解明の試みが，18 世紀啓蒙主義時代を経て 19 世紀後半に実証主義と合理主義を要とする近代科学的理性を生んだその時点で，自ら神の存在を否定しキリスト教の虚構を暴露してしまったのである。そこで我々現代人は神と人間を，あるいは大宇宙と小宇宙とを結ぶ絆を断ち切ってしまった。しかし，肉体を持つが故に神とは異なり形相に成り得ない。聖書は人間アダムが土から生まれたと記し人間が生まれながらにして質料にすぎないという事実を明示している。つまり，永遠の生命を奪われ楽園から追放され死して土に還る運命は，禁断の実を食す以前からすでに定められていたと考えられる。ましてアダムとイヴが犯した原罪を背負う現代人に，時の経過に伴って変化し腐敗する肉体の呪縛から逃れる術はないのだ。

【秩序から混沌へ】

従って，ダンブルドア校長が夜の街に出現し火消しライターで街灯を消すのは，秩序と合理がもたらした二次的質料の世界とも言える現代文明を離れ，忘却された原初の闇，すなわち根源なる第一質料の無秩序な混沌を求めて歴史を遡行する試みであったと解釈できよう。文明が作り出した人工照明を排除することによって，創造力に富む自然光を発見し隠された真実に照射する試みへの挑戦が暗示されている。真実とは何か。それは，人間とは何か―すなわち人間の本質・本性（nature）―を探究する哲学的命題である。

【闇の色は，黒】

ラテン語 ater と niger はいずれも黒色を意味するが，ater は死んで無となり光を失なった灰のような黒であるのに対して，niger は内部に漲る生命力が迸り出て燦然と輝く黒で再生の可能性を予感させる。漆黒の闇に包まれた混沌にこそ豊かな生命力は潜んでいる。古代エジプト人は，国土の大半を占める赤茶けた砂漠のオアシスとしてナイル川河畔に広がる肥沃な黒い土に，万物を生み出す子宮のごとき「聖なる始源」を連想させる象徴性を見出した。しかしエジプトの創世神話は他国のそれとは異なり，大地は男神ゲブが体現する男性原理，天は女神ヌートが体現する女性原理が支配し，ヌートがゲブと，つまり天が地と交接した結果太陽（ラー神）を産んだと語る。このような相違はあるものの，西の空に沈んだ太陽が翌朝東の空に昇って行くのは，死んだ太陽を受け入れ再生させる子宮の役割を夜が果たすからに他ならない。すなわち暗黒の夜は，黒い土と同様に原初の混沌を意味するのである。太陽のみならず人間もまた宇宙の秩序に与かる構成要素として真正の生命力を得るためには，まず死を受容して混沌に回帰する必要があるのではなかろうか。

【闇・混沌・カオスを象徴するもの】

映画の開幕時に登場したフクロウと猫は，いずれも夜間に活動することから混沌を象徴する。フクロウは，エジプトにおいて夕方西の空に没し闇に覆われた海を航海する「死せる太陽」を意味した。ギリシアでは，女神アテナの鳥として知識を表わすとともに，月の省察力を持つため夜の鳥であると考えられる。猫は魔女の乗り物あるいは化身とみなされ，魔女が魔王主催の集会サバトに参加するのに夜空を飛んで行くことから，夜に関連すると言われる。

2．10年後のハリー・ポッター

ダーズリー夫妻宅の玄関先で毛布に包まれ寝息を立てているハリー・ポッター。幼い顔。額に奇妙な稲妻形の傷が浮かび上がる。突然，嵐に見舞われたがごとく雷鳴が轟き稲妻が走る。閃光が傷を照射したその瞬間，10年後まで時間が一挙に飛び去る。ダーズリー叔母さんが扉をたたく音。続いて一人息子ダドリーの階段を駆け下りる足音に，階段下の物置に眠るハリーが目を覚ます。今日はダドリーの誕生日，動物園に行く予定だ。

質問3．稲妻形の傷を描いてみましょう。

質問4．稲妻が光り雷鳴が轟く時，何が起こりましたか。

象徴学において嵐につきものの稲妻と雷鳴は，天に存在する神から発せられた声で，怒りや同意を表わす。その他，星や虹なども神の聖性が顕現したものである。聖性とは，無限性，永遠性，そして創造性といった超越的かつ絶対的な神の属性を意味する。稲妻は，オーストラリア原住民の神話において陰茎を意味し，女性原理を表わす大地と性交すると考えられた。古代ペルーでは豊饒をもたらす太陽を象徴し，雨を伴なって「火と水」すなわち「男と女」を表象し，両者が結合して生み出す力が人類に豊饒や滅亡をもたらすと信じられ，双頭の蛇の姿で描かれた。メキシコでも蛇は稲妻の象徴として崇められた。マヤ遺跡の一つククルカン神殿は，石を積み上げて造られたピラミッドである。古代マヤ人たちは近代科学の洗礼を受けたわけでもないのに早くも天文学的な知識を持ち，一年に二度，春分と秋分の日になれば太陽光線がピラミッドの階段にあたかも蛇行する蛇のようなシルエットを映し出すよう，方位を計算して設計したと言われる。ククルカンとは「羽毛ある蛇」の名を誇るケツァルコアトル神の別称で，大地に宿る生命力を得て生涯に幾度となく脱皮を繰り返す蛇と，天上の神太陽への接神を図って飛翔する鳥の翼を持つ。いわば天と地を結ぶ仲介者として両領域に備わる生命力および創造力を得て大地に豊饒をもたらす農耕の神であった。あるいはまた，形相と質料の調和を表わす象徴であるとも言える。

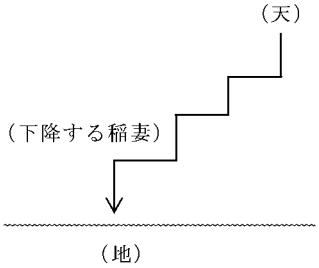
従って，ハリーに稲妻形の傷があるのは，彼自身が神聖な蛇のごとき存在すなわち異教の神である可能性を示唆していると考えられよう。動物園の爬虫類館でハリーが蛇と会話した事実が確証を与える。

しかし原作第一章において玄関先に置き去りにされた赤ん坊ハリーは，自分が特別な存在ですでに有名であるとは知らずひたすら眠り続けている。まして朝になればベチュニア叔母さんが扉を開けたとたんにびっくりして悲鳴を上げるであろうことも，また国中の魔法使いたちが今この瞬間にもハリーが生き残った奇跡を祝って乾杯していることも知る由はない。「知らない」（not knowing）と三度繰り返す理由の一つは，ハリーが無知で限界がある人間に過ぎないのに対して，神は全知全能で無限の超越者であるというキリスト教が案出した自然の摂理を強調するためである。しかし同時に，やがて時が至ればハリーが自ら神となり認識力を得るであろう異教の定めを仄めかしてもいる。

メキシコ・ククルカン神殿

階段に蛇の彫像

ククルカン・ケツアルコアトル



メキシコ国章　1968 年制定
サボテンの上で蛇を食らう鷲

３．ホグワーツ魔法学校を目指してロンドン出発

嵐の晩，稲妻と雷鳴が轟く最中，時計が 12 時を打つ。ハリーが待ち侘びていた 11 歳の誕生日。突然，大男ハグリットが現われてハリーに手紙を渡す。ホグワーツ魔法学校の入学許可書である。「自分は何者か。」といぶかるハリーにハグリットは「魔法使いだよ。」と答える。両親も魔法使いで悪魔ヴォルデモートに殺された真相を知り，自分が帰属すべき世界に旅立つ決心をする。ロンドンのキングズクロス駅でハグリットから魔法学校行きの切符を手渡される。9 and 3 quarters の奇妙な表記に気を取られているうちにハグリットが姿を消し，独り残されたハリーはプラットフォームで途方に暮れる。

質問5．「11歳の誕生日」にどのような意味があると思いますか。
質問6．‘9 and 3quarters’の9と4と3を数秘術的に解釈してみましょう。

目下ハリーは11歳の誕生日を迎えたばかりである。「11」は数秘術的観点から様々な意味を持つ。

①1－1と表記できることから均衡および統一を表わす一方で，葛藤と対立をも意味する。
②10が完全を表わし1から始まり0に終わる周期の完成を象徴するのに対して，11は過剰，繰り返しの始まり，断絶，10の破損を意味する。
③6と5の結合として大宇宙と小宇宙，あるいは天と地の結合象徴である。

いずれもがハリーに該当する。ダーズリー家に預けられてから10年間というもの，時に不思議な出来事はあったにせよハリーは自分がマグルの一員であることに疑問を感じたことはなかった。ところが，11歳になる直前に魔法学校から入学許可書が届いたりハグリットから魔法使いだと知らされて予期せぬ転機を迎えたのだ。無知な幼年期を終えて自立し真実に直面する新たな段階の幕開けである。ダーズリー家でナメクジのようにその存在すら無視され虐げられていたハリーが，魔法界という異界では知らぬ者など一人もいないその名に相応しい力を養うためのしかるべき時を迎えたとも言える。

彼に託された任務は，切り離されて照応関係を失なった天と地，大宇宙と小宇宙とを再結合させ，かつて万物が魂を宿し生命力に満ちていた自然を文明世界に回復させることによって新世界を構築することであった。幼いハリーは不安と葛藤を覚えながらも勇敢にその任務を果たそうと決意し，小宇宙なる心の闇を見つめて魂を探究する旅に出発したのである。

プラットフォーム‘9and 3 quarters’。9は天界の霊が地上の物質界に降りて受肉することを表わす。またその形状は，1で始まり0で終わる生から死へのサイクルが完了すると同時に新たなサイクルが始まることをも意味する。あるいは，7惑星に恒星と天使界を加えた数で，地上から神のもとへと積み重ねられた9層の天界（heavens）を表わすとも考えられる。

4は，地・水・火・風から成る四大元素を意味するとともに，四大元素によって構成されている地上の物質世界をも表わす。従って，赤ん坊のハリーが置かれた玄関の外壁に4番地と記されていたのは，彼が本来帰属すべき魔法界ではなく人間世界に所在するという不自然な現状を明示するためであったと言えよう。3は，キリスト教のみならず異教においても神と子と聖霊あるいは霊・魂・肉体の三位一体を表わす神聖な数である。従って‘9 and 3 quarters’は，大宇宙と小宇宙の照応関係すなわち天と地あるいは神と人間，さらに人間内部で分離した精神と肉体とが聖霊あるいは魂の仲介によって調和し得る可能性を表わしている。ホグワーツ魔法学校行きの切符は，神の理性に至上の価値を認める形而上学的な現代世界から脱却する術を提示しているのだ。

プラットフォーム9 and 3 quartersを探すハリーの目前で，汽車に乗ろうとやって来たウイーズリー兄弟が線路表示9と10に挟まれた壁に体当たりする。彼らの姿が壁に消えるのを見てハ

リーも試すと難なく通り抜けに成功する。頭上には目指す ‘9 and 3 quarters’ の表示。そして眼の前には ‘Hogwart Express’ と行先が書かれた汽車が待ち受けている。壁は異界への入り口であり，汽車は人々を飲み込む現代版の龍と称される。龍の腹は暗闇の世界，混沌を象徴する。

汽車はキングズクロス駅を離れ魔法学校を目指して一路走り続ける。明るいロンドンの街並みは遠ざかり，陽光に照り映える緑の草原を越えてようやく目的地ホグワーツ魔法学校最寄駅に到着する。すでに夜の帳に包まれている。ロンドンは世界に名だたる文明都市。今やハリーは偽りの光に輝く文明から暗黒の自然に，そして秩序から混沌に向かって歴史の流れに逆行する旅に出発したのである。

駅でハグリットに出迎えられた魔法学校一年生たち。その一員としてハリーも小舟に乗り込む。見下ろせば，暗い水面に魔法学校から漏れ出る明かりが反射して輝かしき黒 ‘niger’ を思わせる。流動的な水は，生命を生み出すとともに死者を受け入れる子宮である。エジプト神話によれば，死者は聖なる船に乗って地下世界に降りて行くと考えられた。途中で蛇が船を転覆させて死者の魂を奪おうと待ち受けているが，やがて日の出とともに航海は完了し，死者の魂が新たな生命を得て再生する。死者の代表例として，毎日死の航海を繰り返す太陽が挙げられる。湖も小舟も混沌を象徴する。

４．ホグワーツ魔法学校に到着！　クィディッチの試合

ホグワーツ魔法学校に到着。ある日のこと。授業で生徒たちが箒に乗る練習をしている。ハリーの見事な手綱さばきに注目したマクゴナガル先生がシーカーに抜擢してクィディッチの試合に出場させる。スリザリン寮とハリーが属すグリフィンドール寮との戦いが始まる。ゲームの途中でハリーの箒が奇妙な動きをし始め振り落とされそうになる。友人ハーマイオニもロンもてっきりスネイプ先生が呪文をかけて邪魔しているせいだと思い込む。ハーマイオニが一計を案じてハリーを窮地から救う。激戦の末に彼がスニッチを掴んだ瞬間，ゲーム終了。グリフィンドール寮に勝利の栄冠がもたらされ，観客一同，拍手喝采の渦となる。

質問７．シーカーの意味を調べましょう。

質問８．クィディッチのゲームはハリーにどのような効果をもたらしましたか。

ハリーが乗る箒は試合に使うよう前もってマクゴナガル先生からプレゼントされたものであった。柄には ‘nimbus 2000’ と記されている。nimbus はキリストを初め聖人の頭部を取り巻く「光輪」を，そして seeker は「求道者」を意味する。従って，ハリーがやがて救世主キリストに比肩しうる存在になる可能性を暗示していると理解できよう。ハリーとスリザリン寮のシーカーとが肩を並べて飛ぶ場面でハリーが所属するグリフィンドール寮のユニフォームは赤色，スリザリン寮のは緑色である事実を印象づける。

5．ニコラ・フラメルと賢者の石

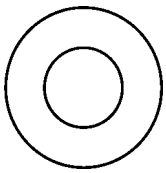
フラッフィという名の犬が守っているものをスネイプ先生が狙っていると思い込んだハリーたち。ハグリットはスネイプを擁護し，校長とニコラ・フラメルが守っているから大丈夫だと口を滑らす。ニコラ・フラメル……聞き慣れない名前を調べているうちに，「賢者の石」の存在を知る。一体，誰だろう？　三人は答えを求めてハグリットの小屋を訪ねる。

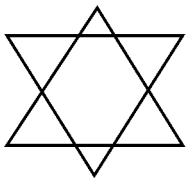
質問9．「ニコラ・フラメル」とは何者ですか。
質問10．「賢者の石」について調べましょう。

ニコラ・フラメルとは，14世紀フランスに実在した錬金術師の名前である。本屋を営む傍ら，見知らぬ男から『アブラハムの書』なる錬金術の本を買ったのを契機に自らも錬金術に没頭し始めた。錬金術は卑金属なる鉛を貴金属である黄金に精製する秘術で，「大いなる術」(オプス・マグヌム)と称される。彼の著書『賢者の術概要』[18]に，「あらゆる金属は硫黄と水銀から成る。……いずれも金属の精子で，硫黄は男性的性質を持ち土と火から成り，水銀は女性的性質を持ち水と空気から成る。」と記されている。黄金以外のあらゆる金属は硫黄と水銀の合成物質であるが，その構成比率に応じて形状および性質は異なる。硫黄は四大元素の火と土，また水銀は水と気を構成要素とする。錬金術の図において硫黄は太陽，水銀は月によって象徴される。錬金術を意味する語 alchemy は，エジプト語の冠詞 al に「黒い土」を意味する khemet を付加したものであると言われる。混沌を表わす「黒い土」に代わって「黒い鉛」を赤く輝く黄金に変えることは，古代エジプトの王たちにとって不可避であった。天空に輝く太陽を最高神として崇拝する王国を治めるには，その輝きを地上で反映する黄金を王自ら所有しなければならなかったのである。完全な金属である黄金を得るためには，水銀と硫黄によって構成される不完全な金属をまず用意する必要があった。これは「第一質料」あるいは「塩」，時には「哲学者の卵」と呼ばれることもあったが，いずれも「混沌」を意味する。ハグリットが鍋に入れて湯煎している巨大な卵。取り出して卓上に置くと，孵化してドラゴンの赤ん坊が誕生する。第一質料が硫黄と水銀に分離した後に再度結合して黄金に変化する錬金術作業過程が無事完遂されるであろうことを予感させる。黄金を表わす象徴には，火と水を合体させた六芒星あるいは太陽を模した◎が掲げられるが，いずれも大宇宙と小宇宙の照応関係および対立物の調和を表わす。従って，六芒星がグリンゴッツ銀行の床に描かれている場面も，やがてハリーが成長し錬金術が守護神として崇拝する両性具有者ヘルメスとなって発現するであろうことを暗示していると言えよう。また地・水・火・風（気）の四大元素および黄金の別称である第五元素の存在は，ハリーに届いた手紙の裏にすでに示されている。紫色の蠟を用いて押された封印に紋章 (a coat of arms) が見える。中央に記されたアルファベット「H」とその周りを取り巻く四匹の動物。象徴学の観点に基づき左側のライオンとアナグマは「火」と「土」を，右側の蛇と鷲は「水」と「気」を体現すると考えられる。「H」は勿論ホ

グワーツ魔法学校（Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry）の頭文字であるが，錬金術の守護神ヘルメスの頭文字であると解釈しては誤りであろうか。ニコラ・フラメルに従えば，動物たちが硫黄と水銀となって黄金すなわち第五元素を生み出すものと推察し得る。トマス・ブラウンの著書『キュロスの園』（1658 年）によれば，「５」は「結婚」と「創出」を意味しＨによって表わされる。ヤハウエを表象するテトラグラマトン YHVH における二つのＨが想起されよう。男性原理(3)と女性原理(2)として天と地を結ぶと考える象徴学的見解に基づくならば，その結合力こそ四大元素を統括する第五元素であると言える。

手紙の宛名も書面もすべてエメラルドグリーン色のインクで書かれているが，錬金術師はエメラルドを「ヘルメスの石」とみなして「５月の露」と呼んだ。エメラルドは蒸留器の中で蒸気に変化し始める「溶解した水銀」を象徴したのである。水銀を意味する Mercury はヘルメス神の別称である。暗い闇に閉ざされた冬を貫く明るい太陽の日差しのように再生を促す色でもある。磔刑に処せられたキリストの血を受けた聖杯もエメラルドであったと言われる。錬金術象徴の一つとしてキリストに代わって蛇が十字架に掛けられた図は，錬金術が死を前提条件とする復活思想に基盤を置いている事実を物語っている。

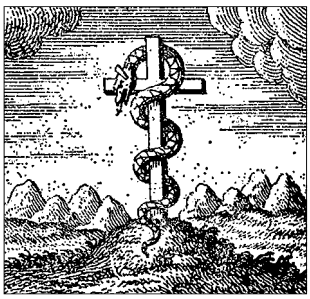

黄金・太陽


六芒星・硫黄と水銀

太陽（硫黄）と月（水銀）[19]

両性具有者ヘルメス神[20]

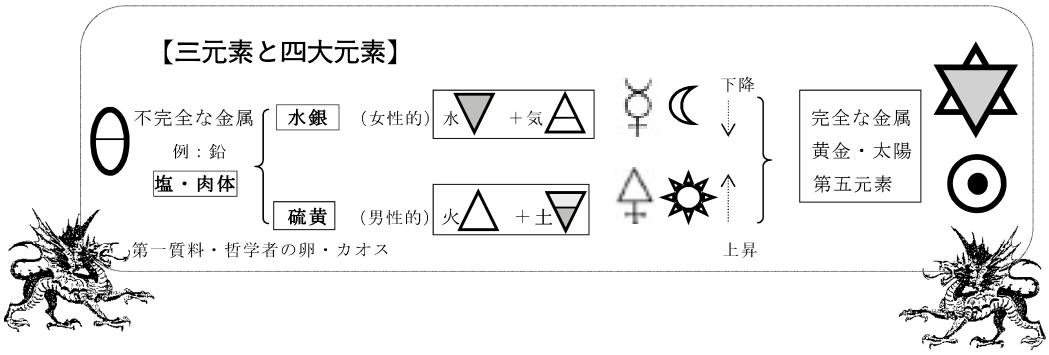
封印に描かれた魔法学校の紋章[21]


十字架に掛けられた蛇[22]

《錬金術の定義　No.1》

「鉛」(カオス・混沌)を「黄金」(第五元素・不老不死の薬)に変える術である

従って，まずは「鉛＝始源のカオス」に還元すべし。



〈カオスシンドローム〉

論文「ヘルメス主義・カオスシンドローム」[23]によれば，ルネッサンス期および19世紀ロマン主義時代，混沌にすぎないと蔑視されてきた森や闇，泥などが実は生命力の源泉であると見直されてカオスシンドロームをもたらした。混沌世界の内部では善と悪が区別されず非合理的なもの，例えば蛇や龍といった怪物が潜み創造エネルギーとして絶えず活動し続けていると考えられた。内包される男性原理と女性原理が性的な出会いを果たした結果，大変動が生じて世界が創造されたという。キリスト教が天国の永遠に存続する静寂を称賛するのに対して，変化し多様性を生み出すヴァイタリティーに価値を見出す。また，時間の観念も，キリスト教は天地創造に始まり最後の審判がくだり世界が崩壊するまでを「直線」になぞらえるのに対して，生と死が繰り返されつつ常に更新し脈々と生命を保ち続けると考えて「円環」を象徴に掲げる。さらなる相違点として，神と人間の繋がりを指摘する。キリスト教が人間は神を写す鏡であるとみなし，神と人間の間に一線を画す「霊肉分離思想」に貫かれているのに対し，ヘルメス主義は両者の照応関係を受け入れて「霊肉一致」を推奨する。このような異教的思想は錬金術の根本原理となり『ヘルメス・トリスメギストスのエメラルド板』[24]に記されている。「上なるもの」と「下なるもの」，すなわち「霊的な神」と「肉体を持つ人間」とは照応関係にあり調和し得る。神は天から地に下降し怪物に出会うことによって復活し得るし，人間もまた努力すれば神の高みにまで到達できるという。

【ヘルメス・トリスメギストスのエメラルド板】(Tabula Smaragdina)

真実である。誤ることなく，確実なこれ以上ない真実である。すなわち，上にあるものは下にあるものの如くであり，また下にあるものは〈唯一物〉の奇跡を実践することにかんがみて，上にあるもののごとくである。またすべての存在は〈唯一者〉から，〈唯一者〉の取り成しにより生じたものであり，したがってすべてのものは作用を介してこの〈唯一物〉から生じてくる。

その父は太陽であり，その母は月である。風がそれを胎内に入れて運び，もって地がそれを育む。これがすべての完成 ── あるいは全世界の完全成立の基である。その力はたとえ地に還元されても完全なものである。汝は火から土を分け，粗野から精微を並々ならぬ聡明さをもって徐々に分けるであろう。それは大地から天界へと昇り，再び地に下降する；また優者と劣者の力を享ける ── しかし汝は全世界の栄光を得よう，それゆえに，汝の前より，あらゆる蒙昧が吹き払え。これは不屈の上にも不屈の精神，うわべのあらゆる蒙を払い，あらゆる堅殻を透過する精神（こころ）である。こうして世界は創られた。爾来（じらい），この方法はあらゆる奇跡を達成するために用いられた。したがって余は，全世界の哲学の三つの部分を掌握する〈三重に偉大なヘルメス〉と呼ばれる。余がここに記したことは，太陽の作用にかかわる真実を語りつくしている。

『世界神秘学事典』[25]

【錬金術の方法】「エメラルド板」より

1．「一なるもののうちより生じ，一なるものに還る。」
2．「分離し，しかる後に結合せよ」
3．「上なるもの（天）は，下なるもの（地）のごとし。」

ヘルメスをはらむ風神
マイヤー『化学の探究』より

【錬金術の作業過程】

一 → 分離 → 死 → 腐敗［黒化］ → 溶解 → 昇華・揮発［白化］ → 凝固・結婚［赤化］ → 両性具有の子／第五元素・黄金／エリクシル／賢者の石

［一］鳥・卵の中にメルクリウス
『沈黙の書』1677 年

世界卵
『古代神話の分析』

［黒化］黒い太陽・黒い烏

［白化］昇華・鷲と白鳥
ミューリウス『改革された哲学』

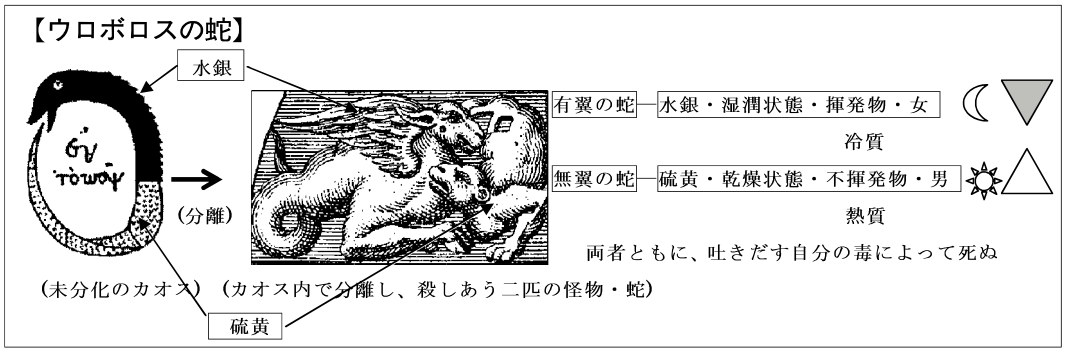
［赤化］硫黄が水銀(蛇)を定着させる
梢に鳥の巣
『心理の鏡』17 世紀

十字架に打ち付けられた蛇
（水銀）エレアーツアル
『太古の化学作業』1700 年

［賢者の石誕生］
ペリカン　1752 年
『両性具有の太陽と月の子』

［賢者の石誕生］
不死鳥
『前兆と奇跡の歴史』

【<一 → 分離 → 死>の象徴詳解図】



混沌に万物創造の始源を見出す錬金術思想は，「ウロ」(自分の尾)に「ボロス」(飲み込むもの)が付いて「ウロボロス」と呼ばれる一匹の蛇によって象徴される。蛇が作る円環の中心にはギリシア文字で「ヘン・ト・バーン」と記されている。「一にして全なるもの」の意である。つまり，万物は「一なる始源」から生まれ，死して再び始源に還ることによって，生命は絶えることなく常に更新され続けるのだ。始源が未分化の混沌であることを表わすために，上半分は黒く下半分は白く塗り分けられている。黒は闇および地と女性原理（水銀）を，白は光および天と男性原理(硫黄)を表わす。つまりウロボロスの蛇は雌雄両性具有で自家受精が可能であるが故に「永遠性」をも象徴すると言える。

不完全な鉛が完全な黄金に変化するためには，この蛇が一旦内部分裂して命懸けで闘わねばならない。ニコラ・フラメル著『象形寓意図の書』[26] は，飛翔する水銀を表わす有翼の蛇と不揮発物の硫黄を表わす無翼の蛇との闘争場面を描く。錬金術師はまず水銀と硫黄が混合した第一質料なる材料を容器（レトルト）に入れ炉（アタノール）の上に置いて熱する。外部から加えられる熱と内蔵する火性によって次第に溶解しタール状の黒い液体に，さらに水分が蒸発して細かな粉末（コフル）に変化する。つまり，まずは熱と冷を和合させる湿なる「水」に変えた後に湿と乾とを併せ持つ「土」を生み出すことによって完全性を目指すのである。水銀と硫黄を表わす二匹の蛇はコラセーヌの牝犬とアルメニアの牡犬とも呼ばれ，分離し猛烈な勢いで嚙み合ううちに両者が吐き出す毒の中で死んでしまう。死体が腐敗し溶解するにつれて悪臭が立ち込める。錬金術は第一質料が熱せられ高温になるにつれて変化する色を作業過程の進度を知るための目安と考えるが，この段階は「黒化」と称され黒い烏が象徴する。あえて人為的に混沌を作り出す必要性を明示している。

さらに熱し続けるうちに粘性の水は風に煽られ大気の中へと上昇したかと思えば冷えて下降し煮詰められ乾燥した粉末になる。このようにレトルト内部で繰り返される第一質料の上昇・下降の過程は，「昇華」あるいは「揮発」と称されて水銀の白色を呈す。白鳥が出現する瞬間である。土が空気に変化したとも言える。やがて容器の内部が赤色に染め上げられて火とも称される硫黄が出現し飛翔する水銀を定着させる。水銀と硫黄があたかも女王と王として結ばれ，両性具有の幼児が誕生する。錬金術師たちは賢者の石，太陽の子あるいは黄金と呼んだが，哲学者アリストテレスは「第五元素」と名付けた。神々しく輝くばかりか，両性具有であるが故に永遠なる存在であることから不死鳥によって象徴される。分離して血みどろの戦いを繰り広げ，起死回生を果たし得た二匹の蛇をカドケウスの杖が表象する。生命力を宿す男根と思しき杖に雌雄二匹の蛇が巻きつき，その先端では調和と安息を得た証に一羽の白鳩が平和の象徴あるいは叡智の象徴として翼を休めている。この杖の所有者は，ギリシア神話に農耕神あるいは霊魂導師として登場するヘルメス神である。彼は牛の腸で弦を作り亀の甲羅に張った竪琴と交換に太陽神アポロンから黄金でできた魔法の杖を授かった。この杖がカドケウスの杖で，秘められたアポロンの力がヘルメスを加護すると言われる。

調和を表わす「カドケウスの杖」

ヘルメスはギリシアにおける錬金術の守護神であるが，ローマではメルクリウスとも呼ばれる。メルクリウスはまた水銀を意味するマーキュリー（mercury）とも言い換えられる。つまりカドケウスの杖には強力な太陽の生命力が宿っているが故にヘルメス神は自ら第一質料水銀のように自由自在に変身できるばかりか，染色体ティンクチャーとして他者に浸潤し黄金化への道にいざなう可能性も大いに期待される。

FIAT

またヘルメスがアルカディアにやって来ると，二匹の蛇が噛み合い喧嘩していた。両者の間に杖を投げつけるとおとなしくなり争いが収まったという。そこでこの杖は平和の象徴と見做されるようになったのである。杖の最上部に鳩が止まっているのは平和のみを表わしているのではない。世界創造の初めに言葉を発した神の霊が宇宙空間に光の軌跡を描きながら地球目指して飛ぶその姿をロバート・フラッドは鳩になぞらえて描いた（p.4参照)。錬金術的観点によれば，この鳩は物質の闇に閉じ込められた精神（霊）である。カドケウスの杖に描かれているのは，黒化，白化そして赤化を経て復活を果たした証と言えよう。

6．禁断の暗い森へ

ハリーら三人が夜外出して校則を破った事実をスリザリン寮のロンがマクゴナガル先生に密告する。奇妙なことに罰として，入ることを禁じられている夜の暗い森に向かうよう命じられる。最近何頭かのユニコーンが殺されたため，犯人を突き止めるのが任務である。闇の中から何者かの気配がしてハリーの前に立ちはだかる。絶体絶命の危機に瀕してハリーが地面に倒れる。あわやの瞬間，両者の間に割って入ったのが不思議な動物ケンタウロスであった。

質問11．森はどのような場所ですか。
質問12．ユニコーンの角にはどのような意味があるでしょうか。

「森」はヒュレhyre（ギリシア語）と称され「質料」を意味する。すなわち「母なる大地」と呼ばれ万物を生み出す「土」と同様に，錬金術の「第一質料」あるいは「哲学の卵」である。「ユニコーン」は額に一本の角が生えた馬であるが，その角に霊性が宿る神聖な存在であると信じられている。キリスト教では「神の言葉を発する剣」としてのキリストを象徴するが，錬金術もまたユニコーンの精液を「創造的な言葉」と解す点において一致する。下記の絵は森の中に生息する鹿とユニコーンを描いたものである。森は肉体，鹿は魂そしてユニコーンは霊（精神）を表わすと言われる。肉体の闇に宿る魂がやがて神の霊に昇格する可能性を示唆していると考えられよう。

森に生息する鹿とユニコーン[27]
ダンブスプリング

ケンタウロス

また鹿なる水銀とユニコーンなる硫黄を内包する「森」はウロボロスの蛇と同様に「塩」であり「混沌」であると言えよう。すなわち森は，第一質料としての水銀が溶解と凝固を経て黄金を生む子宮の役割を務める。死んだユニコーンの周りに広がる血溜り。その色が赤ではなく銀色であるのは，子宮に満ちる羊水が水銀だからである。

「ケンタウロス」は上半身が人間，下半身が馬の怪物であることから人間に備わる神的そして動物的な二重の本性を象徴するとともに，精神と肉体が未分化であるが故に原初の自然に存在し得た野性的な生命力を表わすとも考えられる。

７．ハリーたち三人が魔法学校の地下室に落下

賢者の石がフラッフィに守られているとハグリットから聞き出した三人は矢も楯もたまらない。とうとうある晩のこと，入室を禁じられている三階の部屋に忍び込む。折しもハープの妙なる音が響いている。床には頭が三つも付いた巨大な犬が横たわって寝息を立てている。その腹の下に秘密の部屋へと通じる扉が隠されているのだろう。犬を押しのけて扉を開き覗き込むと一面の暗闇。その時，ロンの肩に犬のよだれがしたたり落ちる。恐怖にかられて見上げれば，犬の頭が三つ迫ってくる。すでにハープの音は絶えている。一瞬にして三人は暗闇の中に落下する。奈落の底に蔓延るつる草がクッション代わりに彼らの肉体を受け止めるが，ホッとする間もなく手足に絡みつき身動きが取れない。「落ち着いて！」と叫び抵抗しないよう指示するハーマイオニがすぐさまこの「悪魔の罠」から抜け出し，ハリーも後に続く。ロンは助かりたい一心で必死にもがけばもがくほどがんじがらめに締め付けられる。絶体絶命の危機に瀕するが，ハーマイオニが太陽を賛美する呪文を唱えたおかげでようやく脱出できる。次に待ち受けているのは鍵鳥だ。

質問 13．何故フラッフィには頭が三つあるのでしょうか。

質問 14．三頭犬とつる草，鍵鳥の共通点は何ですか。

この犬はケルベロスと呼ばれ，悪魔に仕える冥界の番犬として死者が現実世界に蘇えらないよう阻止する。尾は蛇の形をし，首の周りには蛇の頭が数えきれないほど付いている。三つの頭は過去・現在・未来にわたる時間を表わし，時間があらゆるものを食い尽くすのと同様，獰猛に貪り食らい破壊し尽す。すなわち三人は，魔法学校というカオスの中心に存在するさらなる闇―死の世界―に侵入してしまったのである。異界に通じる第一の関門はキングズクロス駅のプラットフォームに隠されていたが，入るには体当たりしさえすればよかった。龍のごとき汽車に身を任せ草原の彼方を目指して水平移動を続けることによって目的地である混沌世界に到着し得たのである。しかし次に彼らを待ち受けていたのは，闇に包まれ底が見えない穴に落ちるという際限なく恐怖心を煽る試練であった。

獰猛な犬の牙に噛み殺されるのはかろうじて免れたものの，死の追っ手から逃れるのは容易ではない。絡みつくツタは常緑樹であり繁茂することから豊かな「生命力」を表わす。しかし植物神としてのオシリス神に捧げられたにもかかわらずオシリスが冥界の守護神でもあったことから「死」をも象徴する。占星術においてツタは「土星を支配する」と考えられるが，土星の守護神は大鎌をふるって人間の命を絶つ悪魔サトウルヌスであることから「死を支配する」と言えよう。ハーマイオニが二人に向かって「落ち着いて！」と叫ぶのは，永遠なる理性や知性に憧れる精神活動を停止して，寿命が定められたはかない肉体を回避するのではなくむしろ積極的に受け入れるよう求めていると解釈できる。生あるものは必ず死ぬという自然の摂理に身を委ねることが再生を可能にするととっさに判断したのであろう。彼女が「悪魔の罠」と呼ぶツタが太陽を嫌うのは，錬金術的に解釈すれば不完全で卑しい第一質料の鉛が完全で貴い黄金に制圧されるのを恐れるからに他ならない。あるいは，混沌の闇が第五元素から放射される真実の光に触発されて自ら生成を促し変化するのを拒んでいるとも考えられる。

ようやく魔の手を振り払い自由を取り戻したのも束の間。無数の小さな鳥が宙に羽ばたいている。次の試練は隣の部屋に入ること。しかし閉ざされた扉を開ける鍵はどこにあるのだろう。クイディチのゲームでシーカー役をこなしグリフィンドール寮に勝利の栄冠をもたらしたハリーに課せられる新たな試練は，スニッチと呼ばれる小さな黄金ボールを捕えるのに代わって唯一本物の鍵を背負う鳥からその鍵を奪い取ることであった。目の前に箒も浮いている。「簡単さ」と一瞬思ったのは間違いだった。一度箒に乗ると今までの静けさは何処へやら，目にも止まらぬ勢いで一斉に鍵鳥たちが動き始めたのだ。シーカーとして獲得した本物を見極める力すなわち認識力を発揮して，ハリーはやがて鍵をもぎ取り扉を開けることに成功する。鍵は，キリスト教において天を開けて秘儀を伝授したり閉めて退けることを意味する。ローマでは霊魂導師ヤヌス神の表象で，夏至と冬至の門を開いて年周期の上昇期あるいは下降期そして陰と陽の支配が交代する時期を示すのに用いるものであった。つまりヤヌス神は生と死の両面を持つと言えよう。錬金術の観点からは，鉛を黄金に変える過程において幾度か繰り返される「溶解」と「凝固」を促進する力の象徴としてローマ教皇の紋章にも金と銀で描かれたと言われる。いずれにせよ，鍵は異界の扉を開き侵入するための必需品で，生と死のみならず光と闇，天と地といった対立する二元を調和に導く可能性が期待される。

ケルベロスの犬

つる草

鍵

８．「ここは墓場か？」「違う，チェス盤の上だよ！」

箒に乗ったハリーが扉を通過したと思いきや，無数の鍵が閉じられた扉に突き刺さるけたたましい音。三人の前には茫漠とした闇が広がり，よどんだ冷たい空気が墓場を思わせる。やがてロンが「墓場じゃない。チェス盤の上だよ。」と叫ぶ。振り下された敵の剣に行く手を遮られ，止む無くここで一戦を交える決心をする。敵は白，三人は黒の駒だ。敵が優勢を誇る最中，ロンは次の一手で自分が敗れると身の危険を察知するが，自己犠牲の代価と引き換えにハリーを前進させる道を選ぶ。予想が的中し，ロンは敵の白い女王が突き出した剣の一撃を浴びて床に叩き付けられる。慌てて駆け寄るハーマイオニにハリーは「動くんじゃない。ゲームはまだ終わっていない。」と気丈な態度を見せて自ら敵の女王に挑み，最後の栄冠を獲得する。

質問 15．チェス盤に黒と白の市松模様が描かれているのは何故ですか。

質問 16．剣は何を意味しますか。

墓場は究極の死を象徴する。「墓場じゃない。」とロンは否定するが，この地こそウロボロスの蛇が有翼の蛇と無翼の蛇とに分裂して共に命尽きるまで闘いぬく戦場である。市松模様のように白黒に塗り分けられたチェス盤。縦横 8 個ずつの升目に囲まれ全部で 64 個の升目が作る正方形が，宇宙の統一を意味する曼荼羅のようにも見える。敵は白を自らの表象として掲げるが，一体，敵は誰であろうか。悪魔ヴォルデモートの手から賢者の石を守ろうと意を決してこれまで幾度かの試練を乗り越えてやって来たからには，ヴォルデモートと答えたいところである。しかし，スネイプ先生の黒マントが悪魔の手先を仄めかすように，そしてまた悪魔サトウルヌスを表わす鉛が黒色であるように，ヴォルデモートを象徴するのは黒であって白はあり得ない。「白と黒」は，「光と闇」「天と地」「陽と陰」と同様に明白な宇宙の対立抗争関係のみならず，「理性と本能」「精神と肉体」「善と悪」といった人間の心理的葛藤をも表わす。つまり，ハリーらはまたもや心の内部で精神と肉体への分裂を強いられた結果，白の女王が演じる理性を今まで現代人として自ら信奉し続けてきたにもかかわらずこの時点で拒絶したと解釈できる。文明化は人類に精神偏重肉体蔑視といった形而上的な価値観を植え付けることによって発展し現代に至った。しかし今やハリーらは，ソクラテスが誕生する以前のギリシアに存在したと言われる有機的自然の豊饒性に意義を見出し回帰する試みを本能的に選択したのである。「チェックメイト！」ハリーが叫ぶと，白の女王の掌中から剣が転がり落ちる。剣はキリスト教における神が世界を創造するために発した言葉，すなわち神の理性を象徴すると言われる。しからばヨーロッパにおいて歴代の王たちが肖

像画を描かせる際に必ずや剣を手にしていたのは，神の代理として王国を治めるからには当然であろう。

こうしてハリーらは心の中で「精神」を体現する有翼の蛇と「肉体」を体現する無翼の蛇とに自己分裂して闘った末に，肉体が勝利を収めると同時に死すべく定められた運命をも受容したと考えられる。ツタも鍵鳥もチェス盤も，精神を重視する合理主義的近代科学から眼を逸らして肉体すなわち自然に宿る神秘的な生命力を再発見するよう，ハリーらばかりではなく全人類に向かって訴えているのだ。錬金術的観点に従うならば，死は人間が賢者の石に匹敵する完全な存在となって再生するために必要な前提条件として不可避である。

《錬金術の定義　No.2》

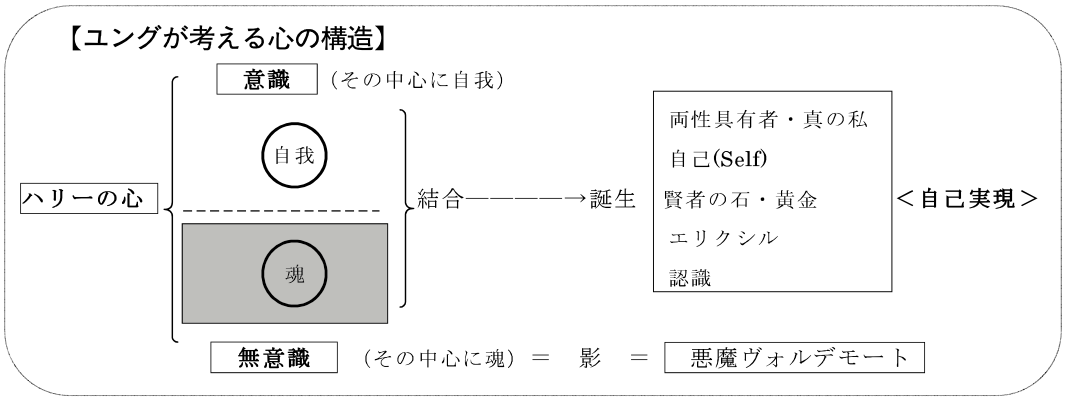
精神を変容させる秘術で，不透明な精神状態を透明化する。

『シュルレアリズム第二宣言』[28]

シュールレアリスムの理念は，たんに，われわれの精神の力を全面的に取り戻そうとする方向をめざすもので，そのための手段となるのは，自分の内部へと向かって目もくらまんばかりに降下することや，隠された場所にたいして組織的に光をあて，その他の場所を次第に暗くすることや，禁じられた地帯の真只中を絶えず歩きまわることなのであり，人間が炎や石と動物とを区別することができるようになるかぎりは，シュールレアリスムの理念の活動は，終焉を告げるという重大な見込みに直面することはないのだということに注意を喚起しておこう[p.106−7]……シュールレアリスムの探究は，錬金術の探究と，目的において顕著な類似性を示しているということに注目してもらいたいと私は思う。すなわち，賢者の石［化金石］とは，すべての物にたいして輝かしい復讐を遂げることを人間の想像力に許すはずであったものにほかならないのであり，そして，今やわれわれは，何世紀にもわたる精神の飼い馴らしと気違いじみた諦めのあとで，ふたたび「すべての感覚を，長く，広く，冷静に狂わせる」ことによって，またそれ以外の方法によってこの想像力を究極的に解放しようと試みているのだ。[p.162]

1920年代を飾るシュルレアリズム運動の創始者アンドレ・ブルトンによれば，シュルレアリズムと錬金術には類似性が存在する。錬金術が目指す「賢者の石」は彼によって「想像力」と呼び換えられ，獲得手段として自分自身の内部に下降することが提唱されている。その途上で動物と火あるいは石とを区別しうるのは，未だ錬金術における第一質料すなわち未分化の混沌を回復できていないからである。シュルレアリズムの活動は，錬金術が掲げる大いなるオプスを実行する試みであったと言えよう。

心理学者カール・G・ユングによれば，錬金術は鉛を黄金に変える秘術あるいは合金術であるばかりではなく，人間の精神を変容し育成するといった心理学的な側面を持つ。



人間の心は「意識」と「無意識」という二つの領域から構成されている。目覚めている意識の中心には「自我」が，無意識には「魂」が存在する。ユングは無意識を「影」と名付けるとともに，人類が共有する受け入れ難い悪に近接する普遍的な影と，ある人にとっては受け入れ難いものではあっても必ずしも悪とは言えない個人的な影とを区別する。精神科医が分析する患者の夢には，まず個人的な影の像が患者と同性の姿で出現する。次に患者の魂が異性の姿で出現するが，女性であればアニマ，男性であればアニムスと称される。大事なのは無意識の闇から自分の魂を救出して自我に統合することである。意識と無意識が分離したまま別々に存在するのでは真の私とも言うべき「自己」は得られない。現代科学文明は人類に物質的な繁栄をもたらした反面で人間をも機械の歯車に見立てるほど機械を礼賛した結果，人為的に作りようのない魂が内在しているという事実を忘却してしまった。本来魂は人間にとって自分が存在する証である。魂を失なった現代人は自分が生きていることの証を，さらには「自分が誰か，何であるか」といった存在に関わる疑問に対する答えを見出したいがために，魂の幻像を夢に見るようになったと言われる。心理学者兼精神科医であるユングは，このような悩みを解消する方法として個人的な影と積極的に対峙し自我に統合することによって自己実現を目指すよう患者に推奨する。錬金術的には溶解と凝固を繰り返して固体なる黄金を作る作業過程を，心理学的観点は人間が精神的に変化し自己同一性を得て個体化する過程に読み替えるのである。しかしその道程は波乱に満ちているため完遂するのは容易ではない。理由の一つとして，人間にはとかく現実が耐え難いものであれば目を逸らし自我を殺してまでも逃避しようとする傾向があるという事実が挙げられる。自分の中に潜む影，それは抑圧されたもう一人の自分であるが，時に悪を体現するとなれば直視するのは恐ろしく，むしろ自我の死を選びがちである。自分の周りにガラスの防壁を築いて影から自我を引き離すので意識朦朧状態に陥り正しい判断力を喪失してしまう。その例として河合隼雄は『影の現象学』[29] において，シェイクスピア作悲劇『マクベス』の冒頭で三人の魔女たちが唱える科白「綺麗は汚い，汚いは綺麗。」が，主人公マクベスの自我が識別能力を失なって錯乱した精神状況を表わし，侵入しようとする影を受け入れたがために悲劇的終焉がもたらされたと述べる。このよう

な症状は「離人症」であるという。同氏によれば，自我が死から身を守るには三つの方法が考えられる。①影から逃げる。②影が力を持つ前に影を殺してしまうなりどこかに閉じ込めてしまう。しかしこれらの方法では影は消滅しかたのように見えても必ずや姿形を変えて自我の前に再現し受容するよう迫るであろうから無理があると否定する。次に③として影と適当な関係を保ちできるかぎり自我に統合するよう勧める。さらに，影を自覚するためには，影なる相手に名付けたり直面して対話する，あるいは対決することが望ましいと述べる。また逆に影が強力になると自我が死ぬはめになりかねないが，一旦は死を体験することも古い自我が崩壊し新しい自我となって蘇る機会に成り得るため，自己実現を可能にする有効な方法であるとも述べる。いずれにせよ，自我と魂，意識と無意識あるいは影とが対立抗争するのではなく，相互に相手を肯定し協調して統合をはかる道を模索することが自己実現を図るための理想的な方法として要望されるのである。

意識と無意識の対立関係は光と闇，天と地，精神と肉体（物質），形相（イデア）と質料といったプラトンの形而上学的二元論を想起させる。従来キリスト教は，精神偏重肉体蔑視の見地から天を見上げて祈り接神を試みるよう奨励するばかりで，人間の心に潜む影に対しては悪魔と同一視し退けようと敵意を燃やし続けてきた。地獄，煉獄，天国という三層の世界構造を想定し，死後，悪魔の住処である地獄に落ちる人間を罪悪視したのである。

しかしアンドレ・ブルトンは，心中に広がる混沌とした闇の世界いわば〈地下世界〉に下降して影なる悪魔と対峙するべきであるといった錬金術的見解を擁護することによってキリスト教に反論する。河合隼雄氏が前掲書で引用するフレイ・ロンの発言「悪とは無意識および影を意味し受け入れるのがつらいものであるが，悪の体験なくして自己実現はありえない。」[30] も，影と悪を同一視するとともに反キリスト教的見解を明示する。

【対立原理を調和させる《想像力》】 エリファス・レヴィ[31]

上なるものは下なるものに等しく，下なるものは上なるものに等し。換言すれば，形態は観念に釣り合い，影は光との関係で測られる物体の容量である。梢は剣の長さだけ深く，否定は逆の肯定と釣り合い，生命を保持する運動の中で生産は破壊に等しく，またその円周が空間の中へ無限に伸び広がっている円の中心とみられないような点は無限の空間に一つとして存在しない。すべての個性はしたがって無限に完成可能である，けだし精神的なるものも物的範疇と照応しており，哲学的に無限な円の中で膨張し，拡大し，周囲へ広がりえない点は考えられないからである。

魂全体について言いうることは，魂の諸能力についても言いうるはずである。

人間の理智と意志は測り知れない範囲の力をそなえた道具である。

しかし理智と意志は，あまりに知られなさすぎる，その絶大な力がもっぱら魔術の領域にしている一つの能力に助けられて，それを媒介として成り立つものである。私が言わんとしている

のは，カバリストたちが「透明体」，あるいは「透けるもの」と呼んでいる想像力のことである。
　想像力は，じじつ，魂の眼の如きものであり，形態が描かれ，保たれるのはその中においてであり，われわれが不可視の世界の反映を見るのもそれを通じてであり，想像力こそ幻影の鏡，魔術的生命の装置である。この力を通じてわれわれは病気を癒し，季節に影響を及ぼし，生者から死を遠ざけ，死者を甦らすこともできるのである，なんとなれば意志を高揚させ，「万象の作因」を把握させるものはこれだからだ。……賢者にとっては，想像することは，見ることである，ちょうど，魔術師にとっては，語ることは，創造することであるように。したがって，想像力の助けを借りて，悪霊，霊魂その他を現実に実際に見ることが可能である。だが達人の想像力は透明であるのにひきかえ，俗衆のそれは不透明である。

エリファス・レヴィによれば，とかく精神が肉体よりも優位にあると誤解されがちであるが本来精神は肉体（物質）と照応関係にあり，両者の調和を回復するには「想像力」という透明な媒体に助けを借りて「見る」ことが肝要である。ブルトンと同様に，第一質料なる混沌が分離し溶解と凝固を繰り返して完全な存在に成り得た証として「賢者の石」あるいは創造力である「火」への変貌を願っていると理解できよう。

ユングによれば，「想像力」（imaginatio）は「心の内に像を結ぶ力」（Einbuidungskraft）を意味する[32]。「想像」は想像力に備わる形成力によって自然の姿を心の中にあるがままに思い描き幻想を生み出す表象行為であって，「空想」（phantasia）すなわち取り留めのない漠然とした物思いに耽り遊び戯れることではない。そして『太陽の樹に関する教示』という著者不明の書籍から次の一節を引用し，錬金術が想像力によって発見すべきものは「哲学の樹」であると説く。「願わくは汝，小麦の若樹をそのあらゆる状態に留意しつつ心の眼で視よ。さすれば汝，哲学の樹を培うことを得ん。」[33]「哲学の樹」とは，『象徴哲学体系Ⅳ』[34]の巻頭に掲げられた挿絵「再生実験をするパラケルスス」において錬金炉アタノールの上に置かれ暖められているフラスコの中を見つめる錬金術師パラケルススの眼に映っている樹に違いない。著者マンリー・ｐ・ホールの解釈によれば，アダムとイヴの堕落が人類にもたらしたのは原罪でありその罰として「魂の樹」あるいは「生命の樹」が剝奪されたのである。樹は焼き尽くされて灰になってはいるがその魂は残留し，生前に宿していた固体性も保持されており形成力となって再生を促す。つまり，人間が堕落し悪に手を染め肉体はいかに朽ちようともその霊性は決して失なわれることはなく，錬金術的方法に従って灰を集めるならば新たな樹に再生することは可能なのだ。再生とは肉体から霊的魂を救出し復活させることであり，肉体は灰すなわち第一質料を入れるために用意すべきフラスコと同様に錬金術容器レトルトとして機能する。従って前掲書の挿絵「アダムから生える樹」[35]でメルクリウスの矢に射られたアダムが第一質料として大地に仰臥し，その肉体から男根が哲学の樹となって空に向かって伸びているのは，再生の一例を示していると理解できよう。哲学の樹は永遠不滅の存在であるが故に不老不死の妙薬，あるいは黄金の華，賢者の石とも呼ばれる。時には樹では

なくダイヤモンドのような結晶体の姿で描かれる。「偉大な作業の達成」と書かれた挿絵[36]では，前述のパラケルススと同じく老人が錬金炉にレトルトを置き中を見つめている。パラケルススの場合レトルトの口が閉栓されていたのとは異なり，開いた口から白い蒸気が立ち昇っていることから，煆焼に始まった錬金術作業が溶解・昇華を経て最終段階を迎えたと考えられる。レトルトの中では一組の男女が結婚し幼児に代わってダイヤモンドと思しき透明な結晶を手で支えている。レトルトに入れられた塩は熱せられて一旦男性的な硫黄と女性的な水銀に分裂するが次第に融解し灰と化して死を体験する。死後まず揮発性の水銀が復活して飛翔し始める。追って不揮発性の硫黄も復活し水銀を牽引して凝固させる。魂が「賢者の石」なる結晶体の姿で誕生したのだ。両老人の机上には書物が開かれた状態で置かれている。「書物」は創造主によって生み出された「自然」を表わす。従って自然は見えざる神が現前したものであり，自然から生み出された人間は神を映す鏡のようなものであると言えよう。つまり「神を頂点に仰ぐ自然」と「人間」は，「大宇宙と小宇宙」と換言されて照応関係を結ぶ。錬金術師はレトルトの中に一つの宇宙を人為的に創造し，実験を繰り返すことによって知り得た再生の法則に従って小宇宙なる自分の魂を救出するばかりか，自然の物質内に閉じ込められ救けを求める大宇宙の魂（アニマムンディ）をも解放して大宇宙に広がる全世界を再構築しようと奮闘するのである。この宇宙の魂こそ，天地創造の使命を担い神の元から地球を目指して飛び立ったあの一羽の鳩である。

再生実験をするパラケルスス[33]
樹が再生する

アダムから生える樹[35]

偉大な作業の達成[36]
両性具有的ダイヤが誕生

錬金術師は，レトルトの内部を見つめながら心の中で目には見えない相手と対話する。相手が神や天使といった実在しない存在であるからには，結局，自分自身との対話に終始することになる。ヘルメス哲学の格言「あらゆる物の一なるものの内より一なるものを瞑想する。」[37]は，自分の無意識が発する声との内的対話を意味するとともにこの行為を「瞑想」と呼ぶ点で注目される。想像力を獲得した証としてレトルト内部に生命の樹なりダイヤモンドあるいは賢者の石によって表象される魂を発見しても，それは「幻視」にすぎない。自分の無意識が投影されていると考え

るべきである。例えば古代人たちが畏敬の念に駆られて太陽を仰ぎ見たのは，見えざる神の姿を無意識裏に想像して太陽に重ねたからに他ならない。合理主義を信奉する現代の科学者であれば，太陽はガスの塊であるにすぎないと一笑に付して旧来の神性を否定するに違いないのだ。しかし古代人は神秘主義的な占星術を唯一真正のオカルト科学であると信じ，大宇宙の中心で輝く太陽は天上に座す神の分身であり太陽の断片が地上に散在する金鉱石に見出されると考えた。つまり彼らが錬金術に励んだのは，黄金を得ることが魂の奪還を可能にするのみならず，根源に隠れたる神を顕在化して認識するためには不可欠な手段だったからである。ユングによれば，神を認識する行為を錬金術師がテオリア（ギリシア語 theoria 見ること•観照）と称したことから，テオリアと言えば錬金術をも意味するようになった。この言葉は本来アリストテレスが直観的理性による神の認識を言い表わしたものであったが，錬金術師が目指したのは増幅的認識である[38]。増幅とは，曖昧で暗示的な体験を精神・悟性・知性・そして瞑想および想像といった心理学的な手法を用いて拡充することで，その成果として神を認識できるという。増幅する必要があったのは錬金術を伝承すべく発行された書籍の記載が不明瞭で理解しづらかったせいであるが，そもそも錬金術が秘術であるからにはむしろ当然であった。このように両者が述べる語義は異なるものの，テオリアの意味を「見る」と捉えた点では一致する。また英語 vision（幻視）がラテン語「visu（見た）」から派生したという事実を想起するならば，テオリアは神を幻視体験によって認識することであると言って間違いない。

「黄金の鋳造」と「神の認識」という二つの錬金術目標を表象する絵としてユングは『黄金の三脚台』[39] を掲げる。画面の左半分には書庫が描かれ修道院長と修道僧そして世俗の人が議論している。右半分は錬金術の実験室で，中央に設置された錬金炉アタノールから炎が燃え上がっている。その傍らには薪をくべる錬金術師が一人。炉の上には三脚台と丸いフラスコのレトルトが置かれている。作業は最終段階を迎えたのだろう。「翼が生えた蛇」すなわち「龍」が一匹見える。既述のケツアルコアトル神と同様に翼は鳥が飛翔する「気」の空間を，そして蛇はその住処なる「地」を体現することから，この龍は「天」と「地」の統合を目指す錬金術の守護神メルクリウスを表象すると考えられる。天界の神から創造の火を付与され自ら生ける水銀として混沌なる第一質料を体現するとともに，オプスの最後に誕生する新しき光と言える「賢者の石」をも兼任して輪廻転生を繰り返す永遠不滅の象徴である。その姿は自分の尾を噛む円環状の蛇ウロボロス，あるいは錬金術の守護神ヘルメスとして描かれる。頭部と足，時には背にも翼を付けて水銀の飛翔性を表わすとともに，カドケウスの杖を手に持ち，天と地を象徴する男と女の両性具有性を顕示する。さらに天と地は霊と肉を象徴することから，霊・肉いずれをも重視して一体化を目指していると言えよう。物質の闇に囚われ救いを求めているのは神で，人間は神を救出し得たならば神によって救われるのだ。これに対してキリスト教は霊肉分離の立場を固持し，神が人間を救うのであって逆はあり得ないと断言する。神を認識するために錬金術師の視線は自身の心の奥底に向けられるのに対して，キリスト教徒は常に天界の彼方を見上げるのである。さらにキリスト教お

よび近代科学の認識方法は，「見る主体と見られる客体とは分離している」と考えるが，錬金術的認識方法は「主客は一致する」と反論する。「観察者は自分の無意識内容を投影しているのだから，見るのも見られるのも自分である」という理由に基づく。

錬金術を精神変容の秘術と見做すユングの観点に基づくならば，「地下室」はハリーの心における無意識領域すなわち「影」を表わす。その中に隠されている「魂」すなわち「生命」を発見し救出することが彼に課せられた使命なのだ。

黄金の三脚台・翼ある蛇(39)

ヘルメス神(40)

アニマ ムンディ(41)

9．ハリーが一人で地下室をさらに「下降する」

ロンの指示に従い使命を果たさねばと奮い立つハリーをハーマイオニが励ます。「大事なのは友情と勇気で勉強ができることではないわ。」二人をチェス盤に残してハリーは独りで地下室の階段を降りて行く。一歩，また一歩と進むにつれて額の傷が痛む。最後の階段を降り切ると，広間の中央にみぞの鏡が見える。その傍らにはクィレル先生が立っている。ハリーは予想もしなかった相手に出会い，しかも賢者の石を狙っているのはスネイプではなくクィレルであると告げられて驚く。みぞの鏡がクィレルの後ろ姿を映している。鏡をのぞくよう迫られハリーが目を向けると，そこにはもう一人の自分がいる。見る者の望みを叶える魔法の鏡。「何が見える？」と執拗に繰り返すクィレルの声が次第に悪魔ヴォルデモートの声に変わり，クィレルの後頭部から悪魔が姿を現わす。ハリーは嘘をついてごまかそうとするが，その目はもう一人の自分に釘付けになったままである。自分に向かってウィンクしポケットから賢者の石を取り出すもう一人の自分に。ヴォルデモートいわく，「善と悪が存在するのではなく，力と力を求めるには弱すぎる者とが存在するだけなのだ。」(原文)賢者の石を巡る戦いで勝者となるのは誰か。気絶して倒れたハリーを置き去りにして飛び去るヴォルデモートの行く先は何処であろうか。

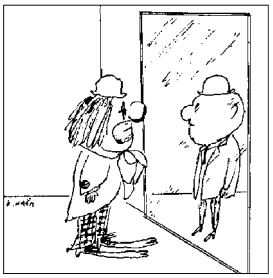
質問17．ヴォルデモートの言葉「善と悪が存在するのではない。」は何を意味していますか。また「力」とはどのようなものでしょうか。

質問 18．何故ハリーは孤児なのですか。

ハリーがたどり着いたのは地下室のどん底。それは彼自身の心の奥底に広がる無意識領域，影の世界である。鏡の中でもう一人の自分がウィンクするのは，ハリーが実体と影に自己分裂した事実を彼に教えるためである。またズボンのポケットから左手で賢者の石を取り出して見せるのは，すでにハリー本人が賢者の石を持つのにふさわしい錬金術的な成長を遂げたことを仄めかしている。賢者の石は第五元素とも称されるが，地と火から成る硫黄と水と気から成る水銀を結合させて四大元素間に調和をもたらすからにはカドケウスの杖と同義であると言えよう。果たしてハリーは杖の所有者ヘルメスに成り得たのであろうか。

鏡像は彼の影であり真実を映し出す。実体と影の分離関係はハンス・ホルバインが描いた『痴愚神礼賛』(42) の挿絵にも見られる。真面目な表情をした道化が持つ手鏡に舌を出してからかっているような顔が映っている。あるいはハンス・ヘームの漫画にも鏡の前に道化が立っているがその鏡像は紳士である。河合隼雄はこれらの絵を著書『影の現象学』(43) に転写して，「影は実体より劣等とは限らない。」と述べる。

『痴愚神礼賛』の挿絵


ハンス・ヘームの漫画

同書によれば，道化は昔ヨーロッパ諸国の王たちがもっぱら余興を楽しむための専門職として宮廷に雇われた者であったが，他国との有事に際していざとなれば王に扮し身代わりとなって死ぬ定めであった。道化の服に黒白の市松模様や迷彩が施されているのは，両性具有者として自らフュシスなる混沌を体現するためであるとともに，王が帰属するゆるぎない規範と秩序によって固定された文明世界ノモスとの間を自由に行き来できる両義的な存在であることを表わす。道化が宙返りなどのアクロバットをして見せるのは，王に真実を突き付けて価値の転倒を図り王国の秩序を崩壊させる力を誇示するためであった。

二枚の絵において，見る主体は道化で見られる客体が王である。従って鏡は自然と文明を隔てる境界であり，道化は王の影として自然を体現しながら同時に王の自我を脅かして文明世界を支配しようとしているとも換言できよう。賢者の石は道化の旗印である笏杖のイメージに重なり，鏡を隔てて見つめ合うハリーとその鏡像もまた，王と道化の関係に倣って自我と影を演じている

と考えられる。影なる鏡像がハリーを見ているのだ。

すでに様々な試練を乗り越えてはきたものの，魔法界を離れ文明世界の住人となって久しいハリーが自分の無意識領域を覆う影を受け入れるのは容易ではない。嵐の晩，ダーズリー家とともに孤島の小屋に避難する。やって来たハグリットに「自分が誰なのか知っているのかい？魔法使いだぎょ。」(Yeh don't know what you *are*? Harry-yer a wizard.[44]) と告げられ茫然として「僕は誰？」(I'm a *what*?) と問い返した時，ハリーの頭には生まれて初めて「自分は誰か，どこから来てどこに行こうとしているのか」といった人間存在の本性本質に関わる哲学的な疑問が過ぎったはずである。誰しもが一度は向き合うこの問いに，鏡に映ったもう一人のハリーが答える。ハグリットの答えは「魔法使い」(A wizard, o'course.) であったが，鏡像の答えは異なる。クィレルとスネイプすなわち善人と悪人が入れ替わったと真実を告げるクィレルも実はハリーが想像力で生み出した自身の影である。従って鏡像は，ハリーが自力で真実を認識し賢者の石に相応しい存在に成長し得た事実を示していると理解し得る。

悪魔ヴォルデモートが「何が見える？」(What do you see?[45]) とハリーに認識力の有無を尋ねるのは，賢者の石に備わる生命力を横取りして自分の肉体が復活するよう切望しているからに他ならない。悪魔ヴォルデモートも実体のない影の住人である。(Mere shadow and vapour..... I have form only when I can share another's body.[46]) 今やハリーの自我は弱まり影に飲み込まれんばかりであるが，王国を再建するには死をも甘受して新たな自我に生まれ変わらねばならない。影から逃げたり拒否することで死を免れることは可能であったにもかかわらず，ハリーはすでに影を自我に統合する道を本能的に選んでいた。無意識領域を表わす暗い森で黒いマントに身を隠した何者かに襲われたあの時，ハリーの前に立ちはだかって助けてくれたケンタウロスに「賢者の石を狙っているのは誰か知っているかい？」と尋ねられ，口にしたら災難がふりかかると恐れられていた悪魔ヴォルデモートの名前を躊躇うことなく答えたのは，初めて影の存在を自覚した瞬間であった。しかしマントに隠れるその姿を見るまでには至らなかった。今，悪魔を直視し対話しているのは，ハリーの自我が影の存在を認識し折り合う術を模索していると考えられよう。しかし影の潜勢力は強くハリーがポケットから取り出した賢者の石を我が物にしようとクィレルの身体を酷使して迫る。その瞬間，広間の周辺を取り巻く赤い炎が業火のごとく一際激しく燃え上がり，錬金術作業が大詰めを迎えた事実を窺わせる。

【ハリーとヴォルデモートの決闘】

一匹のウロボロスの蛇が無翼の蛇と有翼の蛇とに分離して吐き出す毒を互いに浴びて両者ともに死ぬまで壮絶な戦いを続けるとニコラ・フラメルが述べたように，ハリーの自我と影は死の闘争に身を委ねたのである。両者の戦いは不揮発性と燃焼性を兼備する硫黄と揮発する水銀，あるいは固体と気体の対立を意味し，無翼のライオンと有翼の鳥，あるいは金色の太陽と銀色の月によって象徴される。ハリーを初め万物はこれらの対立物が結合して誕生するばかりか，いずれの対立物も相手を内包しているため闘う両者の盾には相手の象徴が描かれている。悪魔ヴォルデモートが「善と悪が存在するのではなく，力と力を求めるには弱すぎる者とが存在するだけなのだ。」（There is no good and evil, there is only power, and those too weak to seek it.(48)）と言うのも，あらゆる金属を構成する硫黄には水銀が，水銀には硫黄が包摂されているように，善と悪も一見対立するように思われるが実は人間の内部に共存しているからである。つまりハリーとヴォルデモートはウロボロスの蛇に描かれた白色の部分と黒色の部分とを体現するとともに，実体と影として表裏一体の関係にある。またウロボロスの蛇をハリーに置き換えるなら，白は彼の精神（ハリー・男性原理）を，黒は肉体（ヴォルデモート・女性原理）を表わすとも言える。ハリーは，自分の体内にイヴ（生命）を宿していたアダムと同様に両性具有者なのだ。従って，ハリーが孤児であるのは自家受精が可能なため両親が実在しなくても誕生しうるからであり，「力」は賢者の石に備わる生命力（Elixir of Life）を意味すると考えられる。

影との対決を止む無く受け入れ激しく揉み合ううちに賢者の石が階段に転がり落ちる。ハリーが必死に手を伸ばして掴みクィレルに押し付けると手も顔も粉々に砕け崩壊してしまう。クィレルの肉体を失なったヴォルデモートは，あたかも亡霊のように空中を飛び去って行く。ハリーは気絶して階段に横たわり，その傍らで賢者の石が赤黒く輝いている。ハリーの自我が影を追い払ってしまったのだ。魔法学校の医務室で目が覚めるとダンブルドア校長から「あの石は処分してしまった」と告げられる。一旦は手にしたものの賢者の石は彼の手元から消えてしまったのである。従ってハリーの魂も未だ影の中から救出されてはいないと考えられよう。しかし影は必ずや自我

に受容されやすい形に生まれ変わって再度ハリーの前に出現するはずである。

10．表彰式 ── グリフィンドール寮の勝利！

魔法学校に入学して早くも1年。努力の成果が発表される表彰式の日。ダンブルドア校長はまずスリザリン寮を最優秀寮と褒め讃えて広間の天井高くスリザリンの寮旗を掲げる。次にハリーら三人に特別賞を授け得点を加算した結果，所属するグリフィンドール寮がスリザリン寮をしのいだことからグリフィンドール寮に軍配を上げて寮旗も取り換える。出席者一同歓喜に沸き上がる。表彰式が終わると一年生たちは汽車に乗りロンドンへの帰路につく。

質問19．スリザリン寮とグリフィンドール寮を象徴する動物は何ですか。
質問20．スリザリン寮とグリフィンドール寮の寮旗は何色ですか。

スリザリン寮の旗は緑色の地に銀色の蛇が描かれているのに対し，グリフィンドール寮の旗は赤地に金色のライオンが描かれている。スリザリンの語源は「蛇のように這う」という意味を持つ slizer であると推察されることから蛇を寮旗に掲げるのは当然である。また，蛇は第一質料としての水銀であるから銀色で描かれるのも理解し得る。しかし何故緑色なのであろうか。錬金術の作業過程においてまず用意すべき第一質料としてのウロボロスの蛇は水銀と硫黄を構成要素として表象するために黒と白に塗り分けられているが，賢者の石に成長すべく錬金術作業の始めに登場した未熟な第一質料(溶解した水銀)―ヘルメスの石―であることを表わす場合は緑色で描かれる(p.15参照)。終局を迎えて黄金に変化すれば，太陽のように赤く輝くはずである。錬金術は「一は全，全は一なり。」と言われるように初めも終わりもなく循環し続けるが故に，蛇もまた緑から赤にまた赤から緑へと変色を繰り返す[49]。

本来グリフィンは上半身が天を表わす鷲，そして下半身が地を表わすライオンと蛇の尻尾が合体した想像上の動物である。象徴学において鷲とライオンは天と地あるいは精神と肉体，神と人間を表わし，両者統合の印としてグリフィンが描かれる。従ってグリフィンも翼ある蛇と同様に両性具有である。第一質料としてのライオンが水銀を表わす有翼のライオンと硫黄を表わす無翼のライオンとの分離抗争を経て再統合した結果誕生する存在で，賢者の石が見せる様々な形態の一つであると言えよう。つまり，錬金術作業過程においてライオンも蛇のように開始時には緑色であっても終局に至って赤変すると考えられる。また，対立原理の調和を目指す錬金術が別名「太陽の方法」と呼ばれるように，賢者の石は太陽によって象徴される。その例として，図『緑色のライオンと太陽』[50]に描かれた緑色のライオンは緑色の蛇と同様に第一質料を体現し，黄金の太陽を飲み込んでいる。このような構図が生まれたのは，太陽を神と仰ぐ古代エジプト人が毎夕西の空に沈む太陽を見てあたかもライオンが太陽を貪り食っているかのようなイメージを抱いたことに起因する。やがて溶解と凝固を経て吐き出すと同時に赤変すると推測される。

従って，校長が旗を取り換えた理由は勿論グリフィンドール寮の勝利を表わすためであるが，錬金術的観点からは作業の始めに用意すべき第一質料としての水銀は緑色あるいは銀色，硫黄そして最後に誕生するはずの黄金は赤色あるいは金色で描かれるが故に，ハリーが賢者の石に至る成長の過程を歩み始めた事実を明示していると考えられる。

二重のウロボロス(49)

グリフィン

無翼と有翼のライオン

緑色のライオンと太陽(50)

表彰式を終えて学生たちはロンドン行きの汽車に乗り込む。心の闇に深く沈潜した後に再び光を求めて浮上し帰路につくのは，溶解から凝固に至る１サイクルの終了を意味する。駅のプラットフォームでハリーは，見送りに来たハグリットから写真をプレゼントされる。優しい両親に愛撫され無邪気に笑っている赤ん坊。写真の左に「Ｊ」右には「Ｌ」の文字が見える。父 James と母 Lily の頭文字である。底部に描かれている翼を広げた天使のような顔。これこそ錬金術の守護神ヘルメスであり，「ハリーは誰か，何者か」といった問に対する答えを示唆しているのだ。別れを惜しむハグリットとハリー。「家に帰るのって変な感じ。」とハーマイオニが言うと「家に帰るんじゃないよ，僕はね。」と答えるハリーには，自分の居場所ばかりではなくこの世に存在する意義をも知り得た者に許される自信と強さが漲っている。

── 結 ──

ハリー・ポッターシリーズの原作が７冊書かれた事実は，錬金術の作業過程が７段の階段で示された図を想起させる。17 世紀ドイツに輩出した医科学者リバヴィウスの著書『錬金術注釈書』に掲載されたもので，最下部には二匹のライオンが頭部を重ねて向き合い口から第一質料の水銀を吐き出している。各階段の両脇には硫黄を表わすライオンと水銀を表わすライオンが鎮座し最上階には王と女王が玉座に就いている。王の足元には太陽，女王の足元には月，そして両者の間には黄金が実る樹が描かれている。第一質料としての水銀が分離溶解および凝固を表わす階段を７段上り切ったならば王と女王が結婚の儀を経て結ばれる。その証に樹が生え黄金が誕生するであろうことを暗示しているのである。

ハリーもまた第一質料として七度壮絶な試練を無事乗り超えるならば，黄金あるいは賢者の石，ヘルメス（メルクリウス）となって復活するはずである。第７巻『死の秘宝』においてハリーと

ヴォルデモートの闘争はどのような結末を迎えるであろうか，その答えは第1巻において早くも予測し得る。すなわち，ハリーは無翼のライオンとして硫黄と太陽を，ヴォルデモートは有翼のライオンとして水銀と月を象徴するが，両者は第一質料としてのライオンに備わる二面性を体現しているため，戦火を交えつつも常に相手を必要とする相互補完の関係にある。杖屋のオリバンダーによれば，ハリーとヴォルデモートの杖には同じ不死鳥から提供された二本の尾羽根が芯に用いられている。つまり，兄弟杖を持つ二人も同じ親から生まれた兄弟のような関係にあると考えられる。従って，勧善懲悪を奨励する結末には成り難いと推察されよう。光と闇に象徴される善と悪を対立概念と考えて善に優位性を与え悪を駆逐する形而上学的二元論を滅却し一なる根源に回帰することが，かつて自然に存在した豊饒なる生命力を奪還するための唯一の手段である。19世紀ドイツに誕生した哲学者ニーチェの名言「神は死んだ」は，形而上学に立脚したキリスト教の神を廃絶し自ら世界構築を目指す現代人の自信に満ちた心境を語るばかりではない。光によって対象物に形を与え理性と道徳を基盤とする秩序世界を作り上げたアポロン神に代わって，混沌なる闇から誕生し陶酔と放埒を極めた酒神ディオニソスを範とする「超人」の出現に活路を見出す。根源的自然を回復させる原動力として「生への意志」を渇望したのである。

このようなニーチェの見解は，「自分は誰か？」と暗中模索するハリーに光明をもたらすであろう。「ハリーは誰か。」「人間とは何か。」ハリーは全人類の代表である。「彼に課せられた試練を私たち現代人もまた自分のものとして真摯に受容し解決を目指し粉骨砕身努力する必要がある！」と『ハリー・ポッターと賢者の石』は現代社会に強く訴え警鐘を鳴らしているのだ。

水銀を吐き出す第一質料としてのライオン

註

⑴　Dan Brown, *The Da Vinci Code*

⑵　映画 *Harry Potter and the Philosopher's Stone*，ワーナーホームビデオ 2001 年
　原作 J. K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone*，（Bloomsbury，1997）

⑶　オカルト（occult）：初 16 世紀　ラテン語 occultare［oc（の上に）＋cult（隠す）＝上を覆い隠す］

⑷　"Genesis" in *Old Testament*，『旧約聖書』「創世記」

⑸　Marc-Antonio Crassellame, La Lumière sortant par soi-même des ténèbres，『闇よりおのずからほとばしる光』有田忠郎訳，ヘルメス叢書（白水社，1994 年）p.86

⑹　ibid. p.87

⑺　"The Gospel According to John" in *New Testament*，「ヨハネによる福音書」『新約聖書』p.260（日本国際ギデオン教会，1989）

⑻　Joscelyn Godwin, *Robert Fludd Hermetic Philosopher and Surveyor of Two Worlds*, (Thames and Hudson Ltd., London, 1979)
　ジョスリン・ゴドウィン，『フラッドの神聖宇宙誌―交響するイコン』クリテリオン叢書，吉村正和訳（平凡社，1987）pp.64-5
　ロバート・フラッド作「光あれ」，『両宇宙誌＝大宇宙誌』p.49，『宇宙の気象学』p.157，
　第一日，フィアト・ルクス……「光あれ」という言葉により，最高の天が現われる。これは光に包まれた最高天であり，人間の目には見えず，知性によってのみ知覚される。その基部は，聖ヨハネが「火の混じったガラスの海」…「ヨハネの黙示録」第 15 章 2 節…と記した水晶天である。
　第二日，神の霊が二回目の回転をすると…「創世記」第 1 章 6 - 8 節にその説明がある…，天上の大空が現われ，上の水…最高天…と下の水が分かれる。
　第三日，下の水は元素世界となる。

⑼　クラッセラーム，『闇よりおのずからほとばしる光』p.94

⑽　ibid. p.103

⑾　ジョスリン・ゴドウィン，『フラッドの神聖宇宙誌―交響するイコン』pp.60-1　〈光の出現〉
　「モーセ，プラトン，ヘルメスの三人はともに一致して，最初の創造行為が光の創造であったと述べている。創造されないのでもなく，創造されたのでもないこの光は，天使の叡智，天における生命を付与する力，人間の理性的な魂，下位世界の生命力である。光は，下向きに階梯を降りるに従って次第に明るさを減少させていき，事物の完成度は光の量に比例する」…pp.27-9
　この図は，暗闇のなかに初めて光が出現するさまを描いている。光が中心からその力を送り出すと，「水の精気」が近いものと遠いものの二つに分離し始める。…p.30　『両宇宙誌―大宇宙誌』p.29

⑿　ibid. pp.62-3　〈水の分離〉
　「第一質料が神の光により受精し，二つに分離する。光から遠い部分［図の中央の暗い雲］は受動状態にとどまり，周辺部には能動的な愛の火が住む。これが下の水と上の水である。中間の明るい雲は神秘的な状態であり，霊的でも物質的でもない。それは，地の精気・水銀の精気・エーテル・第五元素などさまざまな名称で呼ばれる。物体を貫いてそれを変える能力をもち，魂が物質に下降するときの媒体となる」…… pp.35-6　『両宇宙誌―大宇宙誌』p.37

⒀　ibid. pp.62-3　〈四大元素の混沌〉
　「下の水はかき混ぜられて，乱雑で「未消化」の塊状物質となる。そこでは四大元素が互いに争い，温は冷と，湿は乾と闘う。マンリー・ｐ・ホールは，この図が人間の腸に似ていると指摘している。…『人間』pp.48-9 ……。フラッド自身も，人体の腸を宇宙における元素世界に対応させている。」『両宇宙誌―大宇宙誌』p.41

⑭　ibid. pp.50-1　〈プトレマイオスの宇宙Ⅰ〉

「神…ゼウス…の無限の光から，螺旋が物質の最も低いところにまで下降していく。絶対者は自らの無限を限定することにより，創造する。その行為は，キャプションで次のように説明されている。『単一なる統一体，始原，始点，本質の源泉，最初の行為，存在の存在，自然を生む自然』まず宇宙精神…メンス…がくる。それは一方において絶対者に向かって開かれ，他方において創造そのものである，収縮する渦に入り込む。最初のヘブライ文字アーレフがこの始原の始原を示している。そこから他の21の本質…ヒュポスタンス…が，三段階に分かれて流出していく。回転する螺旋の2か10までは，……という天使の9位階を表わす。天使たちは，非物質的で形而上的な領域に住む。11の恒星天にいたって，黄道帯の天球層に達する。その内側に，土星・木星・火星・太陽・金星・水星・月というカルデア人の七惑星がくる。第三段階は月下界であり，そこではすべてのものが火・空気・水・地の四元素から構成される。22の各層を支配する元型あるいは叡智的存在は，ヘブライ文字および翼をつけた頭像で示される。」『両宇宙誌―小宇宙誌』p.219

⑮　ibid. pp.53-4　〈プトレマイオスの宇宙Ⅱ〉

「前図（プトレマイオスの宇宙図Ⅰ）は，神から螺旋を描いて下降する宇宙を示していたが，この図は宇宙全体を同時に捉えた場面を示している。鳩の姿をした神の霊が，無の雲を刻んで宇宙を造っている。三区分はここで，前図よりはっきりと表示されている。天使の9位階は大きく三つに分けられているだけである……それはおそらく，叡知的な神・叡知的＝知性的存在・知性的な神というオルペウス＝プラトン的区分に対応するものであろう……。恒星と七惑星がそれに続き，太陽と月が月下界に光を送る。最初に火の元素がきて，次に空気と水の元素がくる。空気と水には，適切にもそれぞれ鳥と魚が配置されている。次にくるものが地であり，ここでは創造の日の夜明けの地球とみえる。アダムとイヴがエデンの園にいて，もうすでに蛇となにかを語り合っている。」『両宇宙誌＝大宇宙誌』p.9

⑯　ibid. pp.82-3　〈ピュタゴラスのテトラド〉

「創造のもうひとつのモデルは数学モデルであり，プラトンの『ティマイオス』に伝えられているピュタゴラスの数論を起源とする。モナド…1…がデュアド…2…を生み，さらにトライアド…3…とテトラド…4…が生じて，算術数列は無限に続く。図においては絶対的な暗闇が，最初に創造された光としてのモナドより先にくる。デュアドは光と闇の両極であり，それによって「水の精気」が第三のものを形成する。この数論をフランチェスコ・ジョルジョから借りている。ジョルジョの『世界の調和』…1525年…からはまた，普遍的図式としての音楽の比例という観念も得た。」『宇宙の気象学』p.33

⑰　ibid. pp.88-9　〈生成と腐敗〉

「世界は，『単純な四辺形』すなわち原初の四大元素から形成される。四大元素の流出については前二図で示されている。生成およびそれと対をなしていて分離することのできない腐敗は，算術級数の連続的な展開によって生まれる。人間の場合，その出発点は精液である。『精液は水を多く含む液状原質であるがほとんど変化することはない。水のなかに世界の全組織と万物の種子がともに含まれているが，外からは水以外に何も見えない。同じように，種子あるいは精液には…骨・肉・血・腱など，つまり全体としての人間がともに含まれており，次第にはっきりと形を表わしていく』…p.78…。生成と5との関係については，『惑星の人間』…図88…の説明を見よ。最初の立方数8は，『四つの微細な元素を三次元的な混成物に結合したもの，すなわち肉体』を表わしている。夜が昼に続くように，腐敗が自然の結果として続く。『やがて，それは源泉である単純な精液の元素へと戻っていき，別の形で新しい生成を始める。つねに活動を続ける自然は決して休むことがないからである』」『モーゼ哲学』…英語版…p.78

⑱　Nikolas Flamel, Le livre des Figures Hieroglyphiques Le Sommaire Philosophique Le Desir Desire，『象徴寓意図の書・賢者の術概要・望みの望み』有田忠郎訳，（ヘルメス叢書，白水社）1993

⑲　バルヒューゼン，『化学の元素』1718より

太陽は硫黄を，月は水銀を意味する。

⑳　ヤムスターラー，『錬金術の道案内』1625 より
　翼が生えた球体（混沌・カオス）の上に立つ両性具有者ヘルマフロディトス。七惑星が輝く大宇宙の創造主として第一質料ドラゴンを足で制御し，フリー・メイソンの象徴であるコンパスと直角定規を手に持っている。球体は天球（３）と地球（４）を表わすと考えられる。
㉑　J. K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, p.3
㉒　右図：“Figures D'abraham Juif” in Le Livre des Figures Hieroglyphiques pp.92-3
　左図：アーブラハム，『象形文字図表』（17 世紀）より
㉓　Blossom Feinstein, 'Hermeticism' in *Dictionary of the History of Ideas*（1994），『西洋思想大事典』NO.4，坂本賢三訳，（平凡社）pp.277-80
㉔　〈ヘルメス・トリスメギストスのエメラルド板〉
　古代エジプトにおいてヘルメス･トリスメギストス自身の手でエメラルド板に刻まれたと言われる。９世紀アラビア最大の錬金術師ジャービル・イブン・ハイヤーンの著作に初めて記された。原文はアラビア語とギリシア語であったが，それ以後多数の錬金術師が改作し，17 世紀にアタナシス・キルヒャーがラテン語に訳した。
　〈ヘルメス・トリスメギストス〉
　三倍偉いヘルメスの意。エジプトのトト神，ギリシアの錬金術の守護神ヘルメス（メルクリウス）のアレキサンドリア錬金術における転生で，錬金術の始祖。
㉕　荒俣宏編，『世界神秘学事典』（平河出版社，1982）p.78
㉖　ニコラ・フラメル，『象形寓意図の書』p.115
㉗　ダンブスプリング，『形象と浮彫』1678 より
　図の底部に下記の文字が記されている。
　〝In Corpore elt Anima & Spiritus〞「体の中に魂と精神がある」の意
㉘　アンドレ・ブルトン，『シュールレアリズム宣言集』森本和夫訳，（現代思潮社，1989）p.162
㉙　河合隼夫，『影の現象学』講談社学術文庫 811-780，（講談社，1987）p.262
㉚　ibid. p.299, Frey-Rohn
㉛　Eliphas Levi, *Dogme et Rituel de la Haute Magie*，『高等魔術の教理と祭儀　教理篇』生田耕作訳，（人文書院，1982）pp.52-3
㉜　Carl gustav Jung, Psychologie und Alchemie，『心理学と錬金術Ｉ』池田紘一・鎌田道生訳，（人文書院，1976）pp.224-5
㉝　ibid. p.43
㉞　Manly P. Hall, *The Secret Teachings of All Ages—An Encyclopedic Outline of Masonic, Hermetic, Cabbalistic and Rosicrucian Symbolical Philosophy*，『象徴哲学大系　Ⅳ　錬金術』大沼忠弘・山田耕士・吉村正和訳，（人文書院，1981）p.9
㉟　『心理学と錬金術 II』p.45『錬金術小論集』（15 世紀）より
㊱　マンリー・Ｐ・ホール，『象徴哲学体系Ⅱ　秘密の博物誌』p.257
㊲　『心理学と錬金術 II』p.66
㊳　ibid. p.133
㊴　ibid. p.96，マイアー，1677
㊵　ibid. p.98，ヴァレンティヌス，『十二の鍵』1678 より
㊶　『哲学の論争』16 世紀　パリ国立図書館蔵「宇宙の魂（アニマ）」としてのメルクリウス
㊷　エラスムス，『痴愚神礼賛』
㊸　『影の現象学』p.77
㊹　*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, p.42
㊺　ibid. p.212
㊻　ibid. p.213

(47) 『立ち昇る曙光』14 世紀，チューリッヒ中央図書館蔵
(48) *Harry potter and the Philosopher's Stone*, p.211
(49) デオドロス・ペレカノスによるジュネジウスの写本，1478，パリ国立図書館蔵
(50) *Rosarium Philosophorum*，16 世紀，『哲学の薔薇園』ヴァンディアーナ市立図書館蔵